月夜の幽霊

湊　一子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月夜の幽霊

【Ｎコード】
Ｎ０８８１Ｈ

【作者名】
湊　一子

【あらすじ】
僕、津森拓弥は平凡な大学生。ある満月の夜、バイトを終えてアパートの部屋へ帰って来ると、見知らぬ女が部屋にいた。彼女の名前はあや。拓弥と同い年だという。あやは巷を騒がしている「連続通り魔殺人事件」の犠牲者で自分は幽霊だと言い、行くところが無いので、拓弥の部屋に置いてくれと言いだす。この日から人間と幽霊、拓弥とあやの奇妙な共同生活が始まった。

プロローグ（前書き）

荒らし、二次転載は禁止します。
作者は小心者ですので、酷評・あまりにも辛辣な感想等は御遠慮下さい。

プロローグ

プロローグ　月夜

満月の輝く夜だった。僕、津森拓弥はコンビニで弁当を買ってアパートへ帰る途中だった。
もう１０月だというのに今夜はものすごく暑い。そういえば台風が来るんだったな。家を出てくる前に見ていたニュースで言っていたっけ。それなのにどうしてこんなに空が晴れわたっているのだろう。嵐の前の静けさというやつだろうか
　真夏の夜のようなねっとりとした風をうけながらアパートに帰り着くと、もう１２時を回っていた。
　何でこんな時間に一人で弁当を食わなあかんねん、と思いながら買ったばかりのＣＤをコンポにセットし、めちゃくちゃ栄養の偏っていそうな唐揚げ弁当のふたを開けた。今夜はバイト先のホテルでパーティが遅くまであって帰ってきたのが十一時を過ぎていた。だから、もう飯を食わへんと寝ようかなと思ったけどやっぱり腹が減ってコンビニへ何か買いに行くことにしたのだった。
　男一人ちゅうんはほんま虚しいもんやなあ。彼女がほしいなあ。でも女は…。など
と、くだらない事を考えながらペットボトルの茶をすすったときだった。
　いきなり部屋の電気が消えたのだ。それも電気だけやない。さっきまで大きな音を立てていたコンポの音も止まってしまい何も聞こ

えなくなった。最初、僕はなにが起こったのかまったく分からず、状況を把握するまでにだいぶ時間がかかった。
　ああそうか停電やな。と思い窓に目をむけると、夜の街にはネオンが眩しく光っている。どうゆうこっちゃこれはと僕はいささか混乱した。
　そういえば停電する要因なんて何もない。まだ台風は来ていなかったし、近所で電気工事もしていなかった。　それなら電気系統の故障しかない。けど、ブレーカーが落ちるほど電気を使いまくったわけではないし、コンポも止まっているのだから電球が切れたわけでもない。どうやらこれは完全に故障のようだ。こんな時間だから当然のことながら電気屋もしまっているだろう。「なんやねんほんまに。かなわんわ。」と僕は一人ぶつぶつ言いながら懐中電灯を探した。
　しかし不幸中の幸いだったのは今夜が満月だった事だ。部屋の中がすごく明るくてどこに何
があるのかはっきり見えた。それにしても月明かりがこんなにもやさしいものだとは思わんかった。なんだかその光は昼間の太陽の直接的な光と違い、体の内部から照らされているような不思議な感じがした。
　僕はなぜだか急に満月が見てみたくなった。本当にどうしてだか分からないけど。
　満月を見るために僕がベランダのある窓の方へ体をむけたときだ。僕が見えないはずのものを見たんは。
　女が一人立っている。やわらかな月の光を浴びて音もなく窓辺に女が佇んでいた。肌の色が透けるように白く、まるで月明かりに溶け込んでしまいそうや。２０歳前後だろうか、薄暗くてよくはわからないがロングヘアで、切れ長の涼しげな目、女にしては背が高くて細めのわりときれいな女だ。そうまるで、何かの話に出てくる幽霊のようだった。
　しかし僕はそういう非現実的なものは信じない主義だったし、大

方目の錯覚だろうと思っていたのだ。そう確かに最初はそう思っていた。しかしそれはどうも錯覚ではないようだった。女が僕ににっこりと笑いかけたのだ。普通の人間ならここで大声を上げるか、はたまた声が出ずその場にへたり込んでしまうところだろうが、僕は、そのどちらにも当てはまらんかった。恐怖なんて物はこれっぽっちも感じなかった。それどころかその女を見つめていると不思議と幸せな気持ちになってきた。

女がいつまでたっても何も言わないので、僕は自分から話しかけてみる事にした。

「あんた誰や？一体何者なんや。何で僕の部屋におるんや。」

すると女は、ふっとため息を吐いた。

「男の人っていつもそう。どうして初めてあった女には質問しかできないのかしら。本当につまらないわ。他に言う事ってないの？ねぇ？」

僕はいささか不愉快になってきた。一体何やねんこの女は？人の部屋に勝手に入り込んで、その事を責めずに親切に聞いてやった人間に言う言葉かそれは。

「ああそうや。他に言う事なんか何もあれへん。僕はそこら辺になんぼでも居るつまらん男やからな。それがわかっとんやったらさっさと出ていってくれ。」

僕は少し怒った調子で言った。

「ごめんなさい。怒った？別にあなたがつまらないって意味で言ったんじゃないのよ。」

なんかむかついてきた。この女完全に人のことばかにしとる。

「充分そういう意味で言うてるやないか。そんならこっちも言わしてもらうけど、女かてそやないんか？いや女だけやない。人間みんなそやないんか？なんで質問したらあかんのや。何でそれがつまらんのや。人間質問し合ってそんでお互いのこと知って仲ようなっていくもんと違うんか？」

言ってから僕は後悔した。何でこんなこと言うてしもたんやろ。

いつもならこんなこと言わないで軽く流すのに。女は面食らった顔をしてこっちを見ていた。それから静かに口を開いた。
「ごめんなさい。そうね、あなたの言う通りだわ。でもあなたがつまらないなんて言ってないわ。これは本当よ。信じて。私誰にでもすぐにこういう口きくの。きっと性格がひねくれてるのよね。自分でも分かってるけど、どうしようもなくて。それで、この部屋に居たのはこの部屋のカーテンが開いてて、誰も居ないのが見えたから。そこにあなたが帰って来たの。ほんとにごめんね。勝手に入ったりして。」
「いや。ええよ別にそんなあやまらんでも。僕もちょっと言いすぎた。ここまで怒る事なかったよな。ごめんな。」
それから僕らは顔を見合わせて笑った。そして自己紹介をしていない事に気がついた。
「僕、津森拓弥言うねん。出身地は大阪や。今、大学の2年生。今年で二十歳やねん。」
「私はあや。西野あや。ひらがなであやよ。私も今年で二十歳になるはずだったわ。」
「だった？」
ぼくは怪訝な顔をして聞き返した。
あやは少し真剣な顔をして僕にこういった。
「ねえ何を聞いても驚かない？そしてこれからもずっと私と友達でいてくれる？そう約束して。」
あやはそう言いながら僕の前に細くて奇麗な小指を突き出した。僕はためらいがちにあやの小指に自分の小指を絡めた。
「指切りげんまん嘘ついたら針千本のーます指切った。」
あやはそう言って僕の指を振り回して、そして離した。たったそれだけのことなのに何だか僕はどきどきした。あやはほんとに奇麗だったから。
「ああ。約束するで。絶対あんたのこと嫌いになったりせえへん。」
「それじゃあ言うわ。実は私、幽霊なの。人間じゃないのよ。」

一瞬僕は自分の耳を疑った。馬鹿にされているんじゃないだろうかと考えた。けど、あやの目の色は本当に真剣で、嘘の色なんてどこにも見えなかった。
「どうして黙ってるの？やっぱり嘘だと思ってるのね。あなたも他の人と同じだわ。私は嘘なんてついていないのに、どうして誰も私のことを信じてはくれないの？いつだってそうよ。いつだって。いつだってっ！大嫌いよみんな。」
あやはそう吐き捨てるようにいった。でもその言葉は僕に向けられたものでないような気がした。今まで彼女が関わってきたすべての人間に向けられているような気がした。きっと彼女は生きていたときあまり幸せじゃなかったんだろうな。
「何でそんな悲しいこと言うんや。僕がそんなこと思てるように見えたんか？それは心外やな。僕は信じるで。あやがそうやって言うんやったら信じる。あやを信じる。さっきの指きりに誓って嘘はついてない。ほんまやで。」
「……ほんと？」
あやは少し泣いていた。その涙が月明かりできらきら光った。それはとても奇麗で、僕はますますどきどきしてきた。どうしてだろう。あやと初めて会ってまだ１０分くらいしかたっていないのに、僕はあやにときめきっぱなしだ。もしかしてこれが一目ぼれと言うやつだろうか。いや、違うそんなんじゃない。きっとあやが美人だからだ。それだけのことや。僕は美人に弱いんや。それに、ある出来事以来、女というものを信用しないことにしている。
「あやはなんで幽霊になってしもたんや？事故かなんかで死んだんか？」
「……連続通り魔殺人事件て覚えてる？」
「ああ、そういや１ヶ月くらい前にテレビでそんなこと言うとったな。若い女性ばかりを狙って殺してたって・・・…ってまさか・・・。」
「そう、私もその犠牲者のうちの一人よ。」

僕は言葉を失った。何を言ったらいいか分からなかった。そしてやはりあやに騙されているんじゃないだろうかという思いが再び湧いてきた。大方家出でもして男を騙し歩いているんじゃないだろうか。だいたいよく考えてみれば幽霊なんてこの世にいるわけがないんやから。

「やっぱり嘘だって思ってる。」

沈黙に耐えきれなくなったのか、あやが小さな声で呟いた。

「いや、そんな嘘やなんて思ってないけど、いきなりそんなこと言われてもなあ。どう言ったらええかわからんし・…。証拠って言うか、やっぱりそういうんがないとな・…。」

「いいわよ。じゃあ見せてあげる。」

そういうとあやはいきなり僕のほうに歩み寄ってきた。僕は、これはもしかしてキスでもされるんか！？とアホなことを考えてしまった。でも、次の瞬間そんな考えは吹飛んで、変わりに頭の中が真っ白になった。

あやが僕の体を通り抜けたのだ。あやには実態というものがなかった。そう、まるでホログラムを手でつかんだ感じだ。映画とかでは見たことがあったけど、実際にそれを体験して僕の思考回路はしばらくまともに働かなかった。

「どう？これでほんとに信じてくれた？」

まだ混乱している僕にあやは、皮肉とも嫌みともつかないような冷ややかな表情で微笑した。

「あ、うん。そ、そのどういっていいか……。そのつまりやなあ…。えーと。あやは幽霊や。」

僕は、このときほど自分を情けないと思ったことはない。腰を抜かしてその場に座り込む方がまだましだったかもしれない。それとも大声を上げてこの場から逃げ出すか。

とにかくこの時の僕は、本当に混乱していてこんなアホな答え方しかできなかった。あやは僕のことをさぞかし情けない男だろうと思ったに違いない。

しかし、まったく予想だにしなかった反応があやから返ってきた。
「あははは。拓弥君っておもしろい。何当たり前のこと言ってんのってかんじ。普通の人ならここで叫ぶか、気絶するか、私に消えろって言うわよ。」
あやは腹を抱えて笑っていた。さっきまで泣いて怒ってたくせに、女ちゅうもんはほんまに気まぐれやなあ。
僕が少し呆れ顔であやをながめていると、まだ涙目のあやはちょっとむせながら「ごめん」とあやまった。
「ちょっと笑いすぎだね。私。でもすごくうれしかった。消えろなんて言われたらどうしようかと思った。これで、私出ていかずにすむみたいね。」
「え？ちょっと待ってや。出ていかずにすむって・…。」
「私、今日からこの部屋でお世話になることに決めました。よろしくお願いいたします。津森拓弥君。」
あやは、まるで新妻のようにぺこりとかわいらしくお辞儀をした。
「って…。ちょお待ってや。マジで言うてんのか？この部屋男の一人暮らしやぞ。何考えとんねん。」
これにはさすがの僕も参った。そりゃあ、僕やって男やからな。女の子と二人きりで暮らすとなるといろいろと妄想も膨らむわけや。でも、あやはそんな事おかいまなしだった。
「それって、拓弥が私に何かするってこと？そんなの無理よ。だって私は幽霊なんだから。だって、他に行くところもないし私の姿が見える人間と居た方が何かと便利でしょ？」
「そりゃそうやけど・・…。でも、さっき僕ら指切りしたで。あんとき確かに人間の指に触れているような感触があったで。あれはなんなんや？」
そうだ。さっきはまるで実態がなく空気みたいにあやは僕の体をすり抜けていったけど、その前にした指切りは確かに指に触れている感触があった。
「ああ、それはね私が自分でコントロールしたから。これって幽霊

になってみて発見したことなんだけど、普段はさっきみたいに人とか物とかすり抜けちゃうのね。でも、自分がその人に触れたい、その物に触りたいと思ったときは触れることができるの。これってすごくない？」

あやは無邪気に笑いながら言った。しかも僕のこと呼び捨てや。僕も知らない間にあやを呼び捨てにしてたけど、こんな事で幸せを感じてる僕は、よっぽど女に縁がないんやなあと虚しくなってきた。

だから困るんや。こんな欲求不満の僕のところに居座られたら。いくら相手が幽霊とはいえ、同い年のしかも美人。そのうえ、こっちからはまったく手を出せないときたら（最も人間だったとしても、僕にはあやに手を出す勇気なんてないけど。）僕はどうやって、肉体的な不満を解消したらええんや？

でもここまで身の上話を聞いてしまった以上、追い出すわけにもいかなくなってきた。

僕がそんなことで悩んでいると、何も言えない僕に代わってあやが口を開いた。

「そんなに悩まなくても大丈夫よ。私だって、二十歳の普通の女の子なんだからずっと部屋でいるってことはないって。たまには出て行くから一人の時間もできるよ。それにもし、拓弥が彼女でも連れてくるっていうんなら、その時は消えておくから。」

「そうか。そうやな。あやの言う通りやな。それやったら大丈夫か。」

なんだかこっちの考えてることをすべてあやに見透かされているようで僕はめちゃくちゃ恥ずかしくなってきた。

「じゃあ、ここにいていい？おいてくれるの？」

「ああ。ええよ。しゃあないな。」

なかば、あきらめ気味に僕が言うとあやはやったあと叫ぶと僕に抱き着いてきた。もちろん実態ありで。今まで、女性に抱き着かれた経験のなかった僕はこの時ほど驚いたことはなかった。あやっていう人はなんて素直に感情を表現する人なんだろう。と、同時にこ

んなことでこれから先あやとうまくやってけるんだろうかと、不安になってきた。その時の僕には、これからどんなことが起こるかなんて知る由もなかったから。

窓の外ではさっきまでの満月が姿を隠して、雨が降り始めていた。ああ、そういえば台風が来るんだったな……。まだぼーっとしている頭の片隅で僕はそんなことを考えていた。

その夜、僕の部屋の電気は一晩中つくことはなかった。

プロローグ（後書き）

日々忙しいので、なかなか更新することができないかもしれませんが、お暇なときにでも読んで下されば嬉しいです。よろしくお願いします。

嵐の日

1．　嵐の日

あやとの衝撃？の出会いから、一晩が明けたが僕の部屋の電気は一向につく様子がなかった。昨日の天気予報で言っていた通り、昨夜から関東地方には台風が上陸したらしく朝から激しい暴風雨が吹き荒れている。

最も、昨夜僕は一睡もできなかったので朝が来る前にすでにこんな天気になっていることは知っていたけど。ラッキーなことに台風のため大学は休講になった。こんな日に電気屋さんを呼ぶのは、申し訳ないなあと思いつつ、部屋の電気機器類が使えないことにはどうにもならないので、仕方なく電気屋さんを呼ぶことにしたのだった。

携帯電話で電話をかけてから1時間後に現れた、でっぷりと太った頭の薄い電気屋のおじさんはこんな嵐の中の出張を嫌がるでもなく人の良さそうな笑顔で、テキパキと故障がないか僕の部屋の電気配線を点検してくれた。その結果、どうやら築３０年のボロアパートゆえに電気線が焼き付けを起こし、切れてしまっているということだった。おじさんに電気線を交換してもらい、僕の部屋の電気は無事についた。

「また、何かあったときはいつでも電話くださいね。」

と、帰り際も人の良さそうな笑顔でおじさんは帰っていった。

はあ、これでやっと部屋の電気が使えるなあと思って僕は一息ついたが、おじさんが帰った後に姿を現したあやを見て気が滅入ってきた。どうやら、基本的にあやの姿は僕にしか見えないようだった。

電気屋のおじさんが僕の部屋に入ってきたとき、あやは僕のベッドに座っていて正直僕はかなり焦った。あやの姿がおじさんに見えないかと。しかしおじさんはあやに気づく気配もなくさっさと作業を始めたので、ああ、やっぱりあやの姿は僕にしか見えてないんや

なと再認識した。
　その後、僕の気づかぬうちにあやはどこかへ行っていたようだったが、この嵐なので外出はあきらめて帰ってきたらしい。
「あれ？電気屋さん帰ったの。故障たいしたことなかったの？」
「ああ、電気線が切れとっただけやった。このとおり見事に復活や。」
　僕は得意げにＣＤコンポの電源を入れた。昨夜聞くはずだった新しいＣＤを聞くためだ。
　１曲目のメロディーが流れ出して、あやが、
「私、この曲すごく好き。」と、少し淋しそうに呟いた。
「このバンドええよなあ。まだ１年前にデビューしたばっかりで、これがファーストアルバムやけど、僕このバンドごっつ好きやねん。なんか、曲の一つ一つにすごい感情がこもって聞くだけで励まされるって言うか・…。そんな感じせえへん？」
「うん。そんな感じする。落ち込んだときとかに聞くと、元気になるよね。」
「そっかあ。そやな。あやと僕って意外と気が合うてんのとちゃう？」
　好きなアーティストがあやと一致したことで僕はうれしくなった。女の子とこんな風に共通の話題で話せるのはすごく久しぶりのような気がしたから。
　しかしあやは、一言そっけなく、そうかもねと言っただけで曲に聞き入っているようだった。その顔はどこか寂しげで、目は何かを思い出すように遠くを見ていた。
　今はもう嫁に行ってしまったけれど、何年か前にうちの姉貴が失恋したときにしていた表情とあやの表情はよく似ていた。あやも誰かに失恋したのだろうか。僕はそんなことを考えながら窓の外の降りしきる雨を眺めていた。そしてあの出来事を思い出した。
　ちょうど去年の今頃や。こんな僕にも恋人がおった。
　杭瀬咲子。彼女とは大学の同期で、学部は違ったけど選択してい

る授業が同じで、なぜかよく隣の席に座ることが多かった。最初に話しかけてきたのは彼女のほうで、僕が落としたシャープペンシルを彼女が拾ってくれたのがきっかけだった。

授業が終わって、講義室から出ようとしたときふいに彼女に呼び止められた。背が小さいけど、くりくりした大きな目で背が高い僕を見上げて、必死に話す姿勢がかわいいなあと、心底やられてしまった。それからは進んで彼女の隣に座り、いつも講義室に入るとすぐ、背が小さくて人の背に隠れそうな彼女を必死に探した。それから1ヶ月後の6月、生まれて初めての告白をしたんや。

僕は、恋愛というものに全く自信が無かったもんやから、告白の返事は絶対にあかんと思うてた。けど告白してから1週間後、彼女からオーケーの返事をもらったときはほんまに嬉しくて、しばらくの間、勝手にニヤニヤ笑う顔を抑えるのに苦労した。それから3ヶ月の間は今までに無いくらいの幸せを味わった。初めてのデート、初めてのキス、そして、初めて咲子と結ばれたときは、彼女を心の底から愛しいと思った。そうや、人を愛する喜びも切なさも僕はその時に知ったんや。

でも、そんな幸せも長くは続かなかった。付き合って3ヶ月目ぐらいからや。彼女の態度がおかしくなり始めたんは。

そのきっかけを僕はうすうす感づいていた。それは、僕の大学の友達、高城祐樹に彼女を紹介してからだった。高城とは高校から一緒で、その時はそんなに仲良くはなかったけど、大学に入ってからちょくちょく話すようになり話してみるとなかなかいい奴で、よく一緒に飲みに行ったりしていた。

高城は僕と正反対のタイプで、何かを思い立ったらすぐ実行するような行動派タイプだった。誰に対しても物怖じせずにしゃべるし、高校時代からやっているバスケのおかげなのか背も高く、顔もよかったから女にももてた。僕は、いつも高城を羨ましいと思っていた。僕もあんな風になれたらなあと。

でもそのことを高城に話すと、笑い飛ばされた。

「俺にしたら、津森のほうがよっぽど羨ましいで。津森は慎重派やから、俺みたいにすぐ突走って失敗することも無いし、物静かやからおまえちょっとうるさいわ！黙っとれや言うてうざがられることもないやん。俺なんかほんまクラスの女子に嫌われとったで。あんたうるさいわ言うてな。ははは。」

と、高城は豪快に笑っていたけど、僕にしたら彼の無鉄砲さが羨ましくて仕方なかった。だから、僕的にはちょっと早いかなあと思ったけど思い切って彼女に告白することにしたんや。

僕にそういう考えを起こさせてくれた高城には大いに感謝していた。だから、大学の夏休み中ずっと実家に帰っていた高城を大学の後期が始まってすぐ、咲子に会わせたんや。

咲子と付き合い出したことを高城に話したら、ほんまに喜んでくれて、早よ俺に紹介せえや。お前にふさわしい女かどうか俺が見極めたる。と、息巻いていた。そう、高城に咲子を会わせたことがすべての間違いだった。

二人が初めて顔を合わせた日、いつもはよくしゃべる高城がなぜか黙ったまま自分からしゃべろうとしなかった。その時に気付くべきだったんや。その時すでに高城の心の中には咲子が居たということを。その日のことは後々僕の心に引っかかったけど、その後咲子の友達を交えて４人で遊んだときは、いつものよくしゃべる明るい高城で、あの時の高城はどっか体の調子でも悪かったんやろうなあぐらいにしか考えへんかった。咲子も、「高城くんて、いい人よね。あんな友達のいる拓弥がうらやましいなあ。彼女がいないんだったら、私の友達誰か紹介しようか？」と、言っていたぐらいだったので高城と咲子が二人で会っていたと咲子の友達から聞かされても二人を信じていた僕は、二人の仲を疑おうともしなかった。

でも、ある現場を目撃して以来、僕の二人への信頼はだんだんと言いようの無い疑惑へと変化していったんや。

それは、バイトが予想以上に早く終わったので、咲子を驚かせようと何の連絡も無しに咲子のマンションへ向かおうとしたときだっ

た。マンションへ足早に向かう途中、道路の対向車線の歩道を歩く仲の良さそうな一組のカップルが僕の視界に入ってきた。その瞬間、僕は地面に足が張り付いたように動けんようになった。それは、高城と咲子の二人だった。

まだ付き合い始めの初々しいカップルのように少しぎこちなく、でもしっかりと手をつなぎ、高城が大きな声で笑って何か言いながら歩いている。咲子の方は、そんな高城の言うことを心の底から面白いという風に思いっきり笑っていた。僕と一緒にいるときには、見たことも無い楽しそうな笑顔やった。

僕といるときの咲子は、もちろん笑顔を見せたけど、にっこり笑うといった感じであまり腹の底から笑うということはなかった。そりゃ、確かに僕は冗談を言って人を笑わせるタイプではなかったけど、その笑顔を見たときは正直、ほんまにショックやった。

しかも、高城と手をつないでいる。僕が親友と思うとる高城とや。咲子の友達から二人が会っとるとは聞いていたけど、こんな会いかたしとるなんて聞いてないで。反則やろこれは。そう思ったけど僕はアホで卑怯もんやから、二人の前に姿を現すこともできず、気付かれんように二人の後をつけていった。

この時、二人の前に出て行けんかった自分の小心さをこれほど呪ったことはない。自分はなんも悪いことをしてへんのにコソコソ二人の後をつけたりしとんやから、ほんまに自分が情けなかった。

二人はやがて、咲子のマンションに到着した。このとき僕は心の底から咲子一人が部屋に入ってくれることを願った。けどそんな僕の願いはむなしく、咲子に続いて高城も部屋へ入っていった。僕は、ショックのあまりしばらくその場から動くことができんかった。

咲子が浮気をしているのは決定的。それでもなお、僕の心の片隅ではあの二人が僕を裏切るわけがないという思いがあった。そんな心中とは裏腹に頭の中では咲子が高城に抱かれている姿がちらつく。怒りとかそういうもんを通り越して僕は気が変になりそうやった。

一刻も早くここから離れたかった。でも体が言うことを聞かずその場に1時間ぐらいぼーっとしていたような気がする。
やけ酒飲みにいつも行っている居酒屋へ行ったのは覚えてるけど、その後のことはよう覚えてへん。気がついたら自分のアパートのベッドやった。
頭がガンガンして、胸もムカムカして吐きそうやった。でもそんなことはどうでもいいくらいに、胸の奥底から空しさと、悲しみが込み上げてきた。その日は咲子と同じ講義のある日だったけど、もちろんそんなもの行く気になるわけもなく、何も食べずにずっと寝ていた。夕方頃、咲子からどうしたのか心配しているとういような内容のメールが携帯電話に入ってきたけど、よく読まずにすぐ削除した。その後も、何度か咲子から電話がかかってきたけど、僕は全部無視した。もうどうでもよかった。咲子との愛情も、高城との友情もどっちもいらないと思った。退廃感だけが僕の心を支配していた。
次の日、咲子のマンションへ行って昨日見たことを話した。すると咲子の顔色はみるみる変わり、彼女は黙ったままうつむいた。
「僕ら、もう別れるしかないよな。なあ、そうやろ？咲子は高城のことが好きなんやろ？昨日お前ら二人見とってよう分かった。咲子は僕より高城の方が好きや。なあ？」
窓の外ではいつのまにか雨が降り出していた。
咲子はうつむいたまましばらく黙っていたけど、ためらいがちに口を開いた。
「確かに私、浮気した。拓弥とは全く違うタイプの高城くんに惹かれたよ。でも、拓弥のことは今でも好き。これだけは信じて欲しい。」
「そんなん信じれると思うか？浮気したことも許せんけど、もっと許せんのはその相手が僕の友達ってことや。もしも僕がこのこと知った時、どんだけ悲しむやろって考えへんかったんか？」
「・……。」

咲子は再び黙ったまま何も言わなくなった。そして、声を押し殺して泣いていた。でも、その時の僕は自分でも驚くくらいに冷淡で咲子の涙にも動じなかった。

「泣いたら僕が許すとでも思うてるんか？高城と付き合ったらええやん。僕が咲子と別れたらすむ話やろ。高城にもそう言うといてくれ。もう、どんな言い訳も聞きたないし、お前ら二人と今後一切僕は関わらへん。高城と幸せになってくれや。ほな、元気でな。」

そう言うと僕は、泣いている咲子を残して部屋を出て行った。外は、どしゃ降りの雨だったけど、そんなことも気にせず僕は黙々と歩いた。咲子は僕を追いかけては来なかった。

僕の精一杯の強がりやった。咲子のことも、高城のことも許せへんかったけど正直に言うと、僕はまだ咲子のことが好きやった。でも、僕は心の狭い男やから、咲子を許して何事もなかったように付き合っていくなんてことはでけへん。これが、僕の人生初の大失恋や。

ドラマとかではよくある話やけど、ほんまに自分がこんなことになるとは夢にも思うてへんかった。

それ以来、僕は自分にも女の子にもすっかり自信を無くしてしまって、何度か合コンに行ったりもしたけど気分は晴れなかった。その後、人づてに高城と咲子が付き合い出したと聞いた。その後から、高城が僕に誤りたいと言っているということも聞いたけど、高城とはしゃべる気になれず、校内で顔を合わすことがあっても僕は一方的に彼のことを無視し続けた。

それから数ヶ月後、僕らは2年生になりほとんど顔を合わすこともなくなり、その頃にはだいぶ僕の心の傷も癒えて、校内で寄り添っている二人の姿を見てもあまり心が痛まなくなった。

けど、僕の恋愛に対する不信感は相変わらずで新しい恋をしようという気にもならへんかった。

そうか。あれからもう1年やねんな・・…。窓の外では風雨がますます激しくなっている。

「なあ、あやは今までどんな恋愛してきたん？」窓の外を見たまま僕はあやに話しかけた。
あやからの返事はない。僕はこれはもしかしてまずいことを聞いてしまったのかと思い、恐る恐るあやの方へ振り向いた。
あやはベッドの上で眠ってしまっていた。小さな寝息をたてて、安心しきった顔で。
しゃあないなあほんまに。くどいようやけど、ここは男の一人暮らしの部屋やのになんでそんな場所でこんな無防備に寝ることができるんや。いくら幽霊やからって、軽率すぎるぞ。そんなことを僕は心の中で言いながら、あやを起こさないようにそっと布団をかけてやった。しかし、布団はあやに掛からずそのままベッドの上に被さった。
そうか。寝ている間は無意識の状態やから、物を通り越してしまうんや。けど、それやったらなんでベッドの上に寝ていられるんやろ。そこんとこは寝ていても自分で調節してんのやろか・・・。不思議やなあ。幽霊ってもんは。そういえば、僕はあやから幽霊になった詳しいいきさつや、あやの素性とか、そういう基本的なことを何も聞いていない。昨夜は、あやに出会った衝撃やバイトで疲れていたのもあって、あやとろくに話しもせずに寝ることにしたのだった。もっとも、同じ部屋に女の子がいるということで興奮していたのと、あやをベッドに寝かしたため、自分は床で寝たのでその寝ごごちの悪さで　ぜんぜん眠ることはできなかったけど。
そうや！新聞や。不意に思い付いて、僕は押し入れに溜まっている古新聞の束を引っぱりだし、そして、１ヶ月まえの新聞を探した。ここ１ヶ月、定期テストやらバイトやらで忙しくて、ろくに新聞もテレビも見てへんかったからなあ。２，３冊目ぐらいに目を通したときだった。
あった！連続通り魔殺人事件。４人目の犠牲者は女子大生。東京都文京区で連続して起こっている通り魔殺人事件に４人目の犠牲者。殺害されたのは、Ａ学院大学２年生西野あやさん１９歳。９月１２

日、午後１０時ごろ文京区の路上で女性の悲鳴が聞こえ、近所の住民が外に出たところ西野さんが腹から血を流し、路上に倒れているのを発見した。
西野さんは家庭教師のバイトから帰る途中襲われた。西野さんは病院に運ばれたが、出血多量の為１時間後に死亡。文京区では、先月から若い女性ばかりを狙った通り魔事件が多発しており、西野さんは４人目の犠牲者となった。事件の発生した時間帯が同時刻であることや、被害者を殺害するときに使用した凶器が、被害者の傷口から同じ物と判明したことから、これらの事件の犯人は同一犯によるものとみて警察は捜査を進めている・・…。
あやの言うてたことはほんまや。写真もちゃんと載っている。それはまぎれもなくあやの顔だった。
あやの言うてたことをまるっきり信じていないわけではなかったけど、半信半疑やった。
でも、今この新聞を見てあやの言うてることは真実だったわけや。僕は強い衝撃に打ちのめされて、心臓の鼓動がどんどんと早くなっていくのを感じた。
幽霊はこの世に未練を残して成仏しきれなかった人間の魂だとか、世間では言うけどあやもそうなんやろうか。どうしてもやっておきたいこととかあったんかな・・…。それにしても、なんであやは僕のところに来たんやろ。自分の家とか、友達のところとか、他にいくらでも行くとこなんかあるはずなのに。なんでよりによって僕なんや・…。生きているときには何の関わりもなかったのに。そういえば、犯人ってまだ捕まってないんやっけ・・…。　まさか僕に犯人捕まえて欲しいとか言いだすんやないやろうなあ。冗談やないで！面倒なことに巻き込まれるのはごめんや。
あやのことをあれこれ詮索するつもりはなかったけど、これから一緒に暮らす以上、やはりいろいろと聞いておくべきだと思った。あやも僕のことをほとんど知らんわけやし、そのほうがお互いのためにもいいよな。うん。あやが起きたら、あやと話をしよう。どう

せ今日は大学もバイトも休みやし、時間はたっぷりある。
僕は、床にちらかった新聞紙を再び束にまとめ直して、押し入れの中に押し込んだ。しかし、あやの事件の記事だけは、はさみでていねいに切りぬいて机の引き出しの奥に入れた。それから僕は、昼を食べていないことに気付き台風やから外に出るんはいややなあと思いつつ、コンビニへ何か買いに行くことにした。僕がコンビニから帰ってくる頃にはあやも目を覚ましているだろう。僕はいつもコンビニへ行くと雑誌を2時間くらい立ち読みするから。
玄関のドアを開けようとすると、ものすごい風でなかなか開かなかった。それでも、負けじと僕はドアを押し開けた。その瞬間、突風が部屋の中に入ってきたけど、あやは起きる気配もなく眠っている。僕はできるだけそっとドアを閉めた。
あやはまるで台風やなあ・…。突然僕のところへやってきて、心の中をかき乱す・・…。僕はこれから起こる大変な出来事の予兆を感じつつ、暴風雨のなか傘をさして歩いた。
新聞で見たあやの顔が頭にこびりついて消えなかった。僕はその顔を雨で洗い流すように、どしゃ降りの雨の中をずんずん歩いた。

3．　闇夜の月

あやが僕の部屋に居候し始めて、約1ヶ月が過ぎようとしていた。考えていたよりも、心配事は少なく、いたって僕は普通の生活をしていた。

あやは、僕が学校に行っている間はだいたい部屋にいたが、夜、たまに出かけているようだった。

最も、僕はバイトをしているためほとんど夜はアパートにはおらへんかったけど。こんな風に生活サイクルの違う二人だったけど、お互いを干渉すると言うような事はなく、僕はあやの出かける先や、昼間の行動を聞いたりはせえへんかったし（もちろん気になってはいたけど）、あやも差し障って僕のする事に口出しをするということはなかった。

ただ、やはり問題というのは生じてくるものである。あやは幽霊のくせに風呂に入る事が好きやった。別に死んでるんやから、体が汚れたりすることはないと思うんやけどと、本人に突っ込んだら、これだけは譲れない、私が一番リラックスできる時間なんだからと、言い返された。あやも僕のおらんときを見計らって、入ってるつもりなんやろうけど、どうしても見込み違いという出来事は起こる。

運悪く（良く？）あやの風呂の最中に帰ってきたりすると、自制心との戦いとなる。僕のアパートの風呂は、古いせいか声が良く響く。あやが体を洗うシャワーの音や、鼻歌を歌うのが聞こえてきたりすると、一気に妄想が膨らむ。さすがに、あやがおる部屋で一人でするわけにはいかず、僕はトイレにこもる羽目になる。

彼女でもない女の子と暮らすと、こういうことがやっぱり困るなと、しみじみ思ったりする。

逆に、あやが来て良かった事も多々あった。あやは意外と家庭的で、居候の身なんだからと、家事全般を引きうけてくれた。最も、

あやは食物を何一つ口にする事はなかったし、服もずっとそのままだった。死んでいるんだから、もちろん汗をかくことなんてなかったし、腹も減らないとのことだった。だから、僕のためだけに料理を作り、洗濯をし、掃除をする。これはなかなか気分が良かった。

でも、僕にはあやが家事を上手にこなす事が意外やった。あやは見た目から判断すると、ええとこのお嬢さんって感じで、家事など全然しそうにないのに。

「なあ。あやは家の手伝いするんが好きやったんか？あやが意外と家事が上手やから感心したわ。」

手際よく古新聞をまとめているあやの背中越しに話し掛けると、

「意外と～？失礼しちゃう。」と、膨れっ面であやが振り向いた。どうやらまたあやを怒らせてしまったらしい。僕は訳もなくおかしくなって、クックッと笑った。

「また怒ってる。あやはほんまに短気やなあ。初めて会ったときからささいな事で膨れてばっかりや。河豚みたいやな。ぷくーって膨れたほっぺたが河豚そっくりや。」

僕がそう言って笑うと、あやは例のごとくますます膨れっ面になった。

「もう！拓弥って見た目によらず意地悪よね。誰が河豚よ。ほんとに失礼しちゃうわ。こんなかわいい女の子に向かって。そんなこと言うんだったら、もう家事してあげないから！」

どうやらあやを本気で怒らせてしまったらしい。あやは再び僕に背中を向けると、新聞を紐で縛り始めた。

「ごめん。でも僕あやのこと褒めたんやで。最近の女の子にしては、ほんまに料理とか掃除とかうまいからなあ。それに感謝かてしてんねんで。いつも家事やってくれて大助かりやし。」

「ほんとに？」

あやがまだ少し機嫌の悪そうな顔で振り返った。

「ほんまやで。あやが僕の部屋に来てくれてよかったわ。男の一人暮らしなんて、人間らしい生活でけへんからな。」

「なんかうまいこと言ってるわね。でもまあ、そこまで言うのなら許してあげる。はいこれ。まとめてあげたからね。明日は古新聞の日だから、大学行く前に出してよね。」
「はいはい。ありがとさん。ほんまにあやはようできた女や。」
「もういいわよ。そこまで褒めなくて。逆に嫌味だから。」
そう言ってあやは再びそっぽを向いた。でも僕には分かっていた。あやはもう怒ってない。
女の子の事にあまり詳しくない僕も、さすがに1ヶ月同じ相手と毎日顔を合わせていれば、自ずとどう接すればよいか分かってくる。
確かにあやは短気だったけど、後に引きずらないという長所（？）を持っていた。だから、あやが怒ったときには自分が悪くなくてもとりあえず誤る、そしてあやを褒める。そうすればあやの機嫌はすぐ直る。要するにあやは単純や。一言で言えばシンプルという言葉が似合うだろうか。
僕はあやのそういうところが気に入っていた。分かりやすくていい。何でもはっきり言うし、ときには腹も立つけど、あやの言うことは的を突いている。
でも、そんなシンプルなあやにも一つ分からないところがあった。時折見せるとても寂しそうな顔。そんな顔をしているときのあやは僕が何を話し掛けても乗ってこんかった。そんな時僕はなぜだか分からないけど、胸が締め付けられる。そしてあやを思いっきり抱きしめてやりたくなる。もしかしたら僕はあやを好きなのかもしれない。でも、あやは幽霊や。あやが人間の女やったら間違いなく僕はあやを好きになっていただろう。そう生きてるときにもっとあやと話せていたら・・・・・。
こんなことを考えても不毛なことやというのは分かっているんやけど、あやが寂しそうな顔をするたびにこんな思いが心の底から頭をもたげてくる。このままじゃやばいよなあ。僕、幽霊に恋してしまうやんか。叶うわけないのに。あやは僕の事どう思っとるんやろ・・・・・。

などと、僕がいらん事をごちゃごちゃ考えている間にあやはどこかへ出かけたようだった。部屋を見渡しても姿がない。あーあまた肝心な話がでけへんかった。今日こそはなんであやが家事上手で、どんな生活をしてたんか聞こうと思ったのに、結局聞けずじまいや。

僕は寝そべってテレビのリモコンを手にとると、電源を入れた。夕方だったのでニュースしか見るものがなく、適当にチャンネルを合わせた。

北朝鮮問題、イラク戦争、政治家の不正、銀行の不正・・・・。いつもとあまり変わらない内容のニュースをアナウンサーが淡々と読み上げていく。なんかニュースも代わり映えせんなあとテレビを眺めていたときだった。

「9月から東京都内で連続して起きている女性の殺害事件に新展開です。今日の午後、犯人が逮捕されました。」

僕はびくっとして、テレビの前に座りなおした。テレビの画面には中年の男の写真が大写しになっている。ずいぶんと太っている。疲れた感じで、無精ひげを生やし、細い目でこちらをにらみ付けているような写真だった。

「逮捕されたのは東京都江東区に住む無職、斎藤昭夫容疑者４８歳。警察の調べによりますと、昨晩江東区の公園を散歩していた女性から、誰かに付けられていると通報があり現場に急行した捜査員が被害者ともみ合いになっている斎藤容疑者を発見、傷害罪で現行犯逮捕となりました。斎藤容疑者の持っていた刃渡り２０センチの出刃包丁が被害者４人の傷口と一致したこと、その後の家宅捜索で同容疑者のシャツから検出された血液が被害者の一人と一致した事から殺人罪で再逮捕となりました。斎藤容疑者は大筋で容疑を認めているとの事です。動機に関しては現在調査中。分かり次第お伝えいたします。」

僕は、夢中でビデオの録画ボタンを押した。それをあやに見せていいのかどうか分からなかったけど、取りあえず押した。

それと、ほぼ同時だっただろうか。台所のほうでガチャンと何かの割れる音がした。
僕が恐る恐る振り向くと、あやが呆然と立っていた。
「なんや。あや帰ってたんか。気配がないのになんか割れる音したからびっくりしたわ。どうした？グラスかなんか割ったんか？」
僕はつとめて普通に話し掛けたが、あやは何も言い返さず殺人事件のことを伝え終わったテレビの画面をひたすら睨んでいた。画面は天気予報へと変わっている。
「あーあ僕のグラス粉々やん。新しいやつ買わんとあかんなあ。ほら、片付けたるからあやは風呂にでも入ってこいや。今日は日課の風呂はまだやろ？」
僕はあやの足元に散らばったガラスの破片を拾いながらさりげなくテレビのチャンネルを変えた。あやはまだテレビの画面を睨んだままだ。僕は割れたグラスをビニール袋に入れると、掃除機を押入れから出した。
「ほら、そこ掃除機かけるからあやは向こう行っとけ。」
掃除機のプラグをコンセントに差込み、僕は黙って掃除機のスイッチを入れた。ブオーッという掃除機の音だけが部屋に響き渡る。その音は重苦しく、僕の心をいっそう暗くさせた。
あやになんて言っていいか分からなかった。犯人捕まったんやて。よかったなあ。違う、こんな風に無責任な言い方あかん。確かによかったかも知れんけど、こんな言い方はあかん。僕には、あやにかける言葉がどうしても思い浮かばんかった。
「違う。」
それまで押し黙ったままテレビの画面を睨んでいたあやが、沈黙を破るように口を開いた。
僕はびくっとして、掃除機のスイッチを切るとあやのほうへ振り向いた。その顔はこわばって、紙のように青白い。
「どういうことや？さっきテレビに映ってたやつがあやを殺した犯人と違うんか？」

僕は恐る恐るあやに話し掛けた。
「違うわ。さっきテレビに映ってた男じゃない。あんなに太ってなかったもの。それにもっと若かったような気がする・・・・・。それに、それに・・・・。」
それだけ言うとあやはその場にへなへなと座り込んでしまった。
「大丈夫か？あや！」
ぼくは掃除機を放り出してあやの肩を抱いたが、その腕は虚しくあやの体をすり抜けた。あやはよっぽどショックだったようだ。実態を作るのも忘れてたぐらいやから。が、しばらくすると僕の腕の中に柔らかい肌の感触が感じ取れるようになった。あやは小刻みに震えていた。カチカチと歯を鳴らして、まるで暗闇に怯える子供のように。
初めて抱いたあやの体はぞっとするほど冷たく、それは生きた人間の体温ではなかった。それでも僕はしっかりとあやを抱きしめた。抱きしめたところから自分の体温が奪われていくのが分かる。それは不思議な感覚で、肌と肌の触れたところから僕の体温とあやの体温が溶け合って交じり合い、僕のものでもない、あやのものでもない、二人とはまた別の熱を作り出していくようだった。
あやは僕に抱きしめられたままじっとしている。どうやら震えは治まったようだ。そしてゆっくりと顔を上げて、弱々しく口を開いた。それは普段のあやからは想像もできないような、か細く儚い声やった。油断すると聞き逃してしまいそうな。
「拓弥・・・・・。聞いてくれる？あなたに話してどうこうなるって事じゃないのは、分かってるの。でも、聞いて欲しいのよ・・・・・。幽霊になってから誰にも気付いてもらえずにいたから・・・・。ほんとは誰かに聞いて欲しかったの。だからずっと一人で彷徨ってた。お願い・・・・」
あやの瞳は涙で濡れていた。それを見た僕の心の中ではこれから聞くであろうあやの話への大きな不安が渦巻いていたけど、それとは別にざわざわと僕の心を騒がせる妙な感情も芽生えていた。

あやの顔を真正面から見つめる。その顔はとてもきれいで、憂いに満ち、僕の心をより一層ざわつかせた。
「ええで。あやの話全部聞いたる。僕が聞いたるから。」
窓の外はいつのまにか夜の帳が下りてきて、薄暗くなっていた。満月から少し欠けた月だけが晩秋の空に不気味な光を放っている。僕の心臓は今までにないくらい早く脈打っていた。

告白

4．告白

「落ち着いたか？」

まだ青い顔のあやに僕はそっと毛布を掛けてやった。ありがとう、とあやが小さく呟く。

「どや？話せそうか？」

あやは小さく首を縦に振る。そして静かに話し始めた。

「何から話していいのか・・・・。まだ頭の中で整理がつかないんだけど、一つだけ確実なのは、私を殺したのはさっきテレビに映ってた男じゃないって事。私が襲われたとき、夜だったし暗かったからはっきりと顔を見たわけじゃないんだけど、左腕に傷があったのを覚えてる。ニット帽を目深にかぶってたから、顔ははっきり分からなかったけど左腕の大きな傷・・・・・。あれだけははっきりと覚えてるわ。それになんだかどこかで見たような気がするのよ。はっきり思い出せないけど・・・・。」

そこまで話してあやは小さなため息を漏らした。

「本当はね、あのときの事は思い出すのも嫌なの。それなのに誰かに聞いて欲しいなんて矛盾してるよね。でも、幽霊になって一人で彷徨ってる間、苦しくて苦しくてしょうがなかった。私はここに居るのにどうして誰も気付いてくれないの？どうして私の声が聞こえないの？お願いだから私に気づいてって、ずっと心の中で叫んでた。そして解かったの。ああ、死ぬってこういうことなのかな。誰にも気付いてもらえずに存在自体が忘れられていく事なのかなって。そんな事考えてたらすごく悲しくなってきて、なんでか分らないけど拓弥のことを思い出したの。一年前に偶然会ったあの人は私のことを覚えているかしらって。それで気がついたらここに居たの。」

「そうか・・・。」

僕はなんて言うたらええか分らずに一言だけそう言った。そして

そっとあやの手を握った。さっきと同じでその手は冷たい。そして小さく震えている。この手を離してはいけないような気がした。離したらきっとあやは遠くへ行ってしまう。僕の中であやは大きな存在になりつつあった。

僕にだけあやが見えた理由ははっきりとは分らへんけど、きっと僕は忘れていたとはいえ心のどこかであやにもう一度会いたいとずっと思っていたのかもしれない。だからあやが見えたのかもしれへん。僕は自分の中で認めたくなかった感情を今はっきりと認めた。

僕はあやが好きや。あやが幽霊やからあやのことは絶対に好きにならんやろうと頭の堅い自分が決めつけとったけど、今の僕はこの感情を抑えることができん。抗えない。けど、今はその事を言うべきときではないのは分っていたし、言う気もなかった。これ以上あやを混乱させるわけにはいかん。

「なあ、あや。何も一気に話すことはないんや。今夜でなくてもええ。ゆっくりでええんや。無理せんでええんやで。」

僕はできるだけ優しい口調であやをたしなめた。今の僕にはこんな事しか言うてやれん。はっきり言うて僕は気の利く人間ではなかったし、今のあやにできる事はあやの話を聞くことぐらいや。こんな自分に無性に腹がたった。こんなにも無力な自分に。

「大丈夫。少し落ち着いてきたから、全部話すわ。」

さっきまで黙り込んでいたあやが不意に口を開いた。その声はさっきとは違い、少し覇気が戻っていた。顔には乾きかけた涙の筋が光っている。もうあやは泣いていなかった。しっかりとした目で僕を見つめている。僕の動機は再び早くなった。

そしてあやは再び話し始めた。

「あれは9月12日だったわ。忘れもしない。私は家庭教師のバイトを終えてマンションへ帰る途中だった。家へ帰るには二通り道があって、そのうちの一つは近道なんだけど工事中で人通りの少ない道なの。時間も遅かったし、遠回りをして帰ろうかなと思ったんだけど、やっぱり面倒くさいからいつもの道から帰る事にした。それ

が間違いだったのよ・・・・。家まで半分くらいの距離まできたところだったわ。後ろから誰か付いてきてるのに気づいたの。そのときはもう遅かった。振り向きざまにお腹のところを刺されてた。痛くて、苦しくて、それでも私は犯人のシャツの裾をつかんだの。そいつ・・・・薄ら笑いを浮かべて私を見てた・・・・。逃げもせずによ。ざまあみろって言いたげに・・・・。」

そこまで話してあやは下へうつむいて唇を噛み締めた。とても辛い話やった。聞いている僕も、もう聞きたくないと思うような。実際それ以上は聞きたくなかった。けど、話しているあやはもっと辛いんやと思う。それでもあやは話したいって言うたんや。

僕はあやの手をぎゅっと握った。その手はまた震えている。一呼吸おいてあやが再び口を開いた。

「その後のことはあんまり覚えてない・・・・。だんだん意識が遠のいて、目の前が真っ暗になってきて・・・・。気が付いたときには病院のベッドで寝てる自分を見下ろしてた。丁度脈が切れたところみたいで、先生や看護士が必死に心臓マッサージとか電気ショックとか与えてた。テレビのドラマとかではそういう場面を見た事あったけど、まさか自分がそうされてるところを見るなんて夢にも思ってなかったから、すごく動揺したわ。しばらくはパニック状態だった。そのまま病室を飛び出して、病院の屋上で月を見てた。この状況を受け入れるのにすごく時間がかかったわ。私が誰かに刺されて死んだなんて全部ウソ。だって私はここに居るじゃない。ここでこうやって月を見てる。私が死んだのなら、ここにこうして存在してるのは一体誰？ずっとそんなことを考えてた。それでやっと一つの考えに行き着いたの。もしかして私は幽霊になったんじゃないんだろうかって。」

「それから？」

やっとあやの話す口調に落ち着きが出てきた。僕は少し安心してあやの手を握っていた力をそっと緩めた。

「これ以上ここにいても仕方ないなって思って、取りあえず自分が幽霊になってる事を確かめようと思ったの。取りあえず友達のところに行ってみたわ。大声で話しかけてみたり、目の前で手を振ってみたり・・・・。でも気づいてもらえなかった。その後も知り合いの家は全部っていうくらい行ったわ。でも、私に気づいてくれる人は誰一人としていなかった。その後は生ける屍っていうのかな、そんな感じだったよ。なんでかなあ。そのときにふっと拓弥のことを思い出したの。それから一年前の記憶の糸を必死に手繰り寄せてここに辿り着いたの。あの人にも私は見えないかも知れないけど、駄目で元々だから行ってみようって。そして今に至るわけ。」

そこまで話し終えて、あやは少し元気を取り戻したようやった。

「ようがんばったな、あや。話すんしんどかったやろ。話してくれてありがとう。今夜はここまででええよ。ほんまはもっと聞きたいことあるけど、ゆっくりでええんや。時間はいっぱいあるしな。ほんまありがとな。」

そういってあやに微笑みかけた僕はギョッとしてしまった。あやが大粒の涙を流していたから。え!?なんや?僕、泣かすようなこと言うたっけ?何泣いとんねん!

「なんや?僕泣かすようなこと言うたか?大丈夫か、あや。」

僕は焦って必死にあやをなだめようとしたけど、あやが泣きやむ様子は無い。僕は困り果ててしまった。

すると、あやがしゃくり上げながらなにか言っている。

「ん?なんや?」

「あ・・っり・・・がっと・・・う。」

涙交じりのその声はありがとうと聞こえた。何でお礼言われてんのやろ僕。なんもしてへんのに。

「なんでありがとうなんやあや。僕なんもしてへんで。あやの話聞いとっただけや。」

僕はどうしていいのか分らずにおろおろした。こんな状況に遭遇する事は滅多にないからなあ・・・。

あやは鼻をグズグズとすすって、必死で嗚咽を抑えているようだった。そしてやっとこさ口を開いた。

「何もしてないなんてそんなことないよ。私、死んでから今まで誰にもこの事話してなくって、さっきも言ったけど、苦しくて苦しくて仕方なかったの。誰かに聞いて欲しくて、でも私の声は誰にも届かなくて、辛くてどうしようもなかった。みんなもう私のことなんか忘れたのかなって・・・・。私の生きてた証って何もないのかなあって。だから誰かにこの事を話すなんてあきらめてたの。でも今、拓弥に話して自分の辛い事を他人に話すのが、こんなに嬉しいことだなんて思いもしなかったよ。これはね、嬉しくて泣いてるんだよ。当たり前のことがこんなにも嬉しいなんて思いもしなかった・・・。だから、今自分でも驚いてるの。」

あやは泣きながら必死で言葉を繋げた。そんなあやが僕は愛しくてしょうがなかった。今すぐ抱きしめてやりたいと思った。でも僕にはそんな勇気はない。さっきはとっさにあやを抱きしめたけど、抱きしめようと思ったらできない。きっとここで抱きしめたら、僕は後戻りできんようになってしまう。

僕はそっとあやの頭をなでた。今の僕にはそれが精一杯やった。あやが泣き止んで日課の風呂に入っている間、僕は冷蔵庫に冷やしてあったビールを飲んだ。なんだか無性に呑みたい気分やったから。

その夜飲んだビールは何故だかとても苦かった。あやが一緒に呑めたらよかったんやろうけど、幽霊のあやはそうもいかない。その苦味はいつまでも舌の上に残っているようで、歯を磨いてもなかなか取れなかった。

あやはというと、ずっと胸に溜め込んでいたものを僕に話してすっきりしたのか、泣き疲れたのか風呂から上がるなり、ちょっと早いけど私、もう寝るわ。と言って、僕のベッドに潜り込むとさっさと寝てしまった。しゃあないなあほな僕も寝るか。とベッドの隣に

布団をしいた。
部屋の電気を消してそっとあやの寝顔を覗き込む。目の周りの泣き後が痛々しい。でも、その寝顔は安心感に満ちていた。僕は少しほっとして、あやの髪をなでると自分の寝床へ入った。
その夜、僕はなかなか寝付けんかった。あやはなんで泣くほど嬉しかったんやろ…・。僕は、ほんま話を聞いただけやのに…・。そのことがずっと不思議で、ない頭で色々考えた。
生きているときには何でもなかったことが、死んでしまったあやには当たり前ではなくなってたんや。無くしてから、その大切さに気付くというのはよく言われることやけど、そういう感じなのかなあ…・。いや、あやのはそんなもんじゃない。もっと複雑で僕なんかには到底理解でけへん感情や。そう生きている僕には。
だいたい、生きるってなんなんやろ。なんで人間は生きてんねやろ…。どうしてこの世に生まれてくるんやろ…。自分の生きた証を残すためか？
人生楽しまな損て言うけど、今の僕は人生楽しんどるんやろか？今の大学えらんだ理由やって、これといった夢があるわけじゃない。ただ、自分の学力に見合ったところを適当に選んだだけや。別にこれといってやりたいこともないし、これからの時代大学ぐらいは出とかんと就職するときに苦労する。そういうつまらん理由や。
そんなことをごちゃごちゃ考えていたら、結局、自分がなんのために生きているのかよう分らんようになってきた。でも、一つ言えることはあやが僕のところに来てから、つまらなかった僕の日常が一変したという事だ。幽霊と暮らすなんて一生でなかなか体験できることではない。常識では考えられない事を僕は今やってるんや。
そう思うと、“生きる”ということはそういうことの繰り返しかもしれないと思った。色んな出来事を体験して色んな人に出会い、そこから自分なりの“生きる”という答えを見つけていく・・・・。
僕が死ぬときには、あーいい人生だった。面白かったなあ。って思って死ねるんかな。それとも、なんも無かった人生やった。やっ

と終わりかって思って死ぬんかな・・・・。どっちかっていうと、もちろん前者のほうがいいけど、どう終わるかは僕次第やな。
　でもあやは、そんな答えを見つける前に名前も分からない赤の他人によって生きることを辞めさせられてしまった。そして幽霊になった。どうして自分が殺されなければならなかったのかも解らず、それを話そうにも周りの人間には自分の存在さえ気づいてもらえない。そして、やっと僕という存在を見つけたんや。当たり前のことがこんなにも嬉しい・・・。あやの言ったことがようやく頭と心で消化できた気がした。
　これからもあやの話を聞いてやりたい。どんなに辛い事だって聞いてやる。それが僕にできる、あやを喜ばせることなら僕はどんな話だって聞く。
床の上からベッドを見上げると、あやはこちらに背を向けて眠っていた。その背中に「お休み。」と、そっと声をかけて僕も寝る事にした。徐々に睡魔が襲ってきて、眠りに落ちていくのが分かる。
　今夜あやの告白を聞いて、僕は自分の中で認めまいとしていた気持ちをはっきりと認めた。
　あやが好きということ。これから僕の恋がどうなるかはわかれへんけど、一つ言えることは、僕は女運が悪いということや。前の恋愛は彼女の浮気であかんようになって、新しく恋した相手は幽霊・・・・。とにかく今日は寝よう・・・。これからどうするかは明日考えればいい・・・。
僕の意識はだんだんと闇の中へ沈んでいった。

突然

5．突然

頭の深くに沈んだ意識の奥に、携帯電話のアラームの音が聞こえる。寝不足の頭にはかなりきつい音や。今日は講義が一限目からある日やから、7時半に起きんとあかん。家賃の安さゆえ、大学から遠いアパートを選んでしまった宿命や。

やかましい音を立てているアラーム音を止めると、僕はベッドで眠っているあやをそっと覗き込んだ。あれだけ大きな音だったにも関わらずあやはすやすやと寝入っていた。今まで、心の中に溜め込んどったことは相当あやにとってストレスやったんや。夕べ僕に話した事で緊張の糸が切れたんやなあ・・・・。ゆっくり眠れや・・・・。

そんなことを心の中で呟くと、僕はあやを起こさないようにそっと学校へ行く支度を始めた。トースターで食パンを焼いて、ブルーベリージャムを薄く塗る。あやが、ブルーベリーは目にいいんだからと、しきりに進めるからついつい買ってきてしまったものの一つだ。

あやがこの部屋にやってくるまでの僕は、朝飯を食べたり食べなかったりだったけど、あやが来てからは必ず食べてから出かけるようになった。そうでないと、あやに口うるさく嫌味を言われる。あやは相当厳しい家庭で育ったんかな。そんなことを考えながらトーストを牛乳で胃に流し込む。いつもなら、あやがサラダかスープを作ってくれるけど、今日はしゃあない。

ベッドの上で寝息をたてているあやの耳元にそっと「行って来ます。」と声をかけると、僕は部屋を出た。

朝の空は清清しい秋晴れで、僕は新鮮な空気を思い切り肺に吸い込んだ。東京の空気は汚れているとはいえ、朝の空気はやはり澄んでいるような気がする。最も、僕の田舎にはかなわへんけど。

僕の出身は大阪や言うても、生駒の山の方の大阪や。びっくりするぐらいの田舎で、近くにコンビニも無い。でも自然が豊富な分、空気だけはきれいで、高校の修学旅行のとき初めて東京に来たときは、ほんまに排ガス臭いなあと実感した。まあ大阪の中心部も負けず劣らずやけど。

それから約1年後、東京の大学に進学が決まったときは、田舎者の僕がほんまにあんな大都会で暮らせるんやろか、と不安になったけど東京にやってきてもうすぐ2年。なんとかやっていけるもんや。郷に入らば郷に従えや。ほんまその通りやな。などと、くだらないことを考えているうちに大学近くの駅に着いた。駅から大学目指して歩いていく。この駅から大学までの通りは桜横丁と呼ばれるくらい桜の木がたくさん植えられており、毎年春には見事な花を咲かせる。

その光景はほんまにきれいで、叙情的な風景にあまり興味が湧かない僕もこの桜並木ばかりは感動した。今は冬に向かっているから枯葉ばかりやけど、春になったらまた見事な花を咲かせるんやろうな。あやはこの桜並木のこと知ってんのやろか。東京育ちっぽいから知っとるかな。もし知らんかったら連れてきてやりたい。気づけばあやのことばかり考えとる。ヤバイな・・・・。

「拓弥。」

その時、僕は背後から懐かしい声に呼び止められた。振り向くと、そこには彼女、いや元彼女杭瀬咲子が立っていた。彼女をこんなに至近距離で見るのは一体いつ振りなんやろ。多分一年前のあの雨の日から見てない。

相変わらず背が小さいな。僕を見上げる目線は初めて言葉を交わしたあの日となんも変わってない。小さな針で刺されたようにちくりと胸が痛んだ。いや、それ以上に突然の出来事に僕は動揺した。なんで今さら僕になんか話し掛けてくんねん！あれからずっと咲子と高城の二人を必死で無視し続けて、ようやく忘れられたのに。咲子かて僕と関わりたないはずや。それやのになんで・・・・。

心の中でそう叫んだけど、実際には口から出てこんかった。ほんま、こんな自分が嫌になる。
「おはよう。」
なんも言えん僕に変わって、口を開いたんは咲子やった。
「あ、お、おはよう。」
情けないくらいしどろもどろや。
「久しぶりだよね？こうやって会話するの。」
「うん・・・。」
「ごめんね。呼び止めたりして。すぐにすむからちょっと聞いてもらってもいい？」
「うん・・・。」
久しぶりに近くで見た咲子は少しきれいになっているような気がした。高城とうまいこといってんのかな。噂では順調やみたいなこと聞いとるけど・・・・。
「あの・・・・。ごめんね。あれから一年も経っちゃったけど、ずっと拓弥に謝りたくて。拓弥は何も悪くないのに、傷つけちゃったから。あのときも私泣いてばっかりで、謝れなくて・・・。高城くんと付き合い始めてからもずっと心の中に拓弥のことがひっかかってたの。毎朝、拓弥の後姿を見るたびに謝らなきゃって・・・。結局一年もかかっちゃった。許してなんて言わないけど、本当にごめんなさい。」
そう言って咲子は頭を下げた。僕はなんて言っていいか分からず、ただ呆然としていた。こんな自体は全く予測不可能やったから。僕が何も言えないで黙っていると、再び咲子のほうから口を開いた。
「祐樹も・・・あ、高城くんもね拓弥に謝りたいってずっと言ってるんだよ。けど、津森は俺のことずっと無視しとるからな。あいつ相当怒ってんねや・・・って言って、たまに落ち込んでる事あるから・・・・。もし拓弥の心の整理がついてるんだったら、高城くんに話し掛けてあげて。もちろん無理にとは言わないけど。」
僕は、ずっと黙ったまま咲子の言う事を聞いていた。遠くの方で

予鈴の鳴っているのが聞こえる。
「あ、予鈴だね。授業始まっちゃう。呼び止めたりしてごめんね。私もう行くね。拓弥も今日は一限からでしょ？遅刻しないようにね。それじゃね。」
　咲子は軽く右手を振ると、講義堂の中へ入っていった。ああそうや、僕も早よ行かな・・・。さっきの咲子の声が頭の中でこだましていて、頭の中がぼーっとしていた。
講義室に入って、授業が始まってからも壇上で小難しい講義をしている教授の声は耳に入らず、僕は咲子に言われたことを頭の中で反芻して考えていた。
咲子はずっと謝りたかったって言うとった。高城も。咲子と別れた直後は僕と別れた後に、僕の親友やった高城とすぐ付き合い出した咲子の神経が知れんかった。でも、二人は二人なりに辛い選択をしたんかもしれへん。僕はあの時、一人被害者ぶって咲子をなじって部屋をでてきてしまったけど、自分の彼氏を裏切ったという咲子の罪悪感はきっと本当やったような気がする。それはきっと高城も同じ気持ちやったんやろう。
それでも二人は付き合っとる。それは互いが本当に好きだったから。僕はあやが幽霊である事で、一瞬は自分の気持ちを抑えつけようとした。あやのことは好きやないと。久しぶりに女の子と話してそれで舞い上がってるだけなんやと。でも今は違う。ほんまにあやのことが好きやと心から思う。幽霊なんてことは関係ない。あやというその全部が好きや。まあ、こんな偉そうに言うてもまだあんまりあやのこと知らんけど。
とにかく、きっと二人も今の僕と同じ気持ちだったんだろう。何にも顧みず、ただ相手のことが好きだった。たとえ今の彼氏を傷つけ、親友を裏切ってもこの人が欲しかった。ただの浮気やなかったんや。だから一年たった今でも付き合うとる。僕を裏切ったことを後悔はしても、お互いを選んだことをきっと後悔はしてないんやろう。今でこそ、その気持ちは分かるけどあのときの僕にはそんな心の広さ

はなかった。
高城とも長いこと口を聞いてない。最後に話したんは一体いつかも忘れたぐらいや。高城のことを完全に許したと言えば嘘になるけど、一年前のような怒りとかはもうない。咲子の言うように、高城に話し掛けられたらいいんやろうけど、さんざん彼を無視してきた今となってはなんだか話し掛けにくいものがある。高城もただ好きやっただけ。僕を傷つけるつもりなんてなかったんかもしれへん。
運命の人・・・・。運命の人だったんかな。あの二人はお互いに。運命の人・・・。運命の人・・・。なんやろう。この言葉がやけに頭の中でひっかかる。思い出そうとしてもなかなか思い出されへん。なんかここまで出かかっとんやけど・・・。運命の人・・・、あや・・・・。いや、違う違う。確かにあやのことは好きやけど、運命の人とかそういうんとは違う。だいたいあやとは絶対に結ばれることのない運命なんやから。幽霊やもんな・・・。僕があやに告白することはないんやろうな。きっと一生。あやかていつまでもこの世におるわけやない。いつかはいなくなってしまう。そういつかは・・・・。恋愛って難しいな・・・・・。
「おい！津森！おいってば！どうしたんだよ。ぼーっとして。」
「えっ？」
ふと我に帰ると、目の前に佐木智弘のとぼけた顔があった。
「もう授業終わったぞ。お前今日は上の空だったな。講義室にお前が入ってきたとき、俺が声かけたのに気付かずに通り過ぎたろ。」
「ああ、そうやったんか。悪い悪い。ちょっと考え事しとってん。」
佐木は同じ学部の友達で、入学式のときのオリエンテーションでたまたま隣の席に座ったことから仲良くなった。根はすごくいい奴なんやけどいかんせんこいつも女運が悪い。まあ、悪いというかはっきり言うてもてるタイプではない。
背も低いし、小太りやからお世辞にもかっこいいとは言えんし、合コンとかに行っても一人で暴走して先走ってしまうから女の子から引かれっぱなしや。ほんま悪い奴やないんやけど。

「そういや津森、さっき校門の入り口で咲子ちゃんと話してなかったか？お前らもう普通に話とかできるの？あんなに避けてたのにさ。」
見てたんかい！面倒くさいやつにみられてしもうた。ほんまに悪い奴ではないんやけど、詮索好きなんやこいつは。これも、もてへん理由の一つやろな。
「あー、なんかたまたま校門の所で会うたんや。向こうから普通に話し掛けてきたから・・・。僕も普通に挨拶して、それだけやで。後は別にお前の期待しとるようなことはないで。」
これ以上詮索されるのが嫌だった僕は、適当にかわして逃げようとしたが佐木の好奇心がそれで治まるはずもなかった。
「えー？そうかあ？なんかただ挨拶って感じじゃなかったぞ。けっこう深刻そうな顔してたけどなあ。津森も咲子ちゃんも。もしかして復縁か？高城のやつが浮気したとか？なあ、いいじゃんか。教えろよ。」
なおも佐木はしつこく聞いてくる。こうなったこいつはほんまにうざい。
「あのな佐木、悪いねんけど僕、先週の統計学のレポートのことで沢渡教授に呼び出しくらっとんねん。次は確か休講やから、教授の研究室行ってくるわ。早よ行っとかんとあのおっさんうるさいから。ほなまたな。」
こういうときは嘘も方便や。僕は佐木を残して早々にその場から立ち去ろうとした。やっとこいつのやっかいな尋問から逃れられる。
「ちょっと待てよ津森！」
背を向けて歩き出した僕を再び佐木が呼び止めた。なんなんやほんまに！
「なんやねん？まだなんかあるんか？しつこいぞ。急いでる言うたやろ。」
「まあそう怒るなよ。お前を呼び止めたのは、別に咲子ちゃんとのことを聞きたいだけじゃなかったんだぜ。今夜Ｏ女子大とのコンパ

があるんだけど、急に一人来れなくなってさ。メンバーが足りないんだよ。お前どうせ暇だろ？来ないか？」
どうせ暇で悪かったな・・・・。そういうことなら早よ本題を言えよ。僕は少しイライラしたけど、なんとか感情を抑えて平静に返した。
「いや、ええわ。僕コンパとかそういうんしばらくええから。今日も早よ帰ってレポートのやり直しやし、誰か他の奴探してくれ。」
夕べ、あやからあんな話を聞いたばかりだったし、今日は早く帰ってあやの傍にいてやりたかった。
というか、僕が早くあやの顔を見たかった。今までの僕なら誘われればよほどの事情が無い限り友達の誘いを断る事はなかったけど、今はあやがおる。僕の勝手な片思いやけど、あやは僕の大切な人（？）になりつつある。
僕がそういうと、佐木は予想通りのオーバーアクションで返してきた。
「どうしたんだよ！珍しい。お前に断られるとは思ってなかったよ。ちえっ、しょうがないな。他当たってみるよ。じゃあな。」
そう言うと、佐木は小太りな体を左右にゆすりながらカフェテリアの方へ歩いていった。やれやれ、やっと開放された。
さてと、佐木に嘘をついた以上、ここにおるわけにはいかんな。また見つかったらあれこれとうるさい。僕は取りあえず沢渡教授の研究室の方へ歩き出した。中庭の銀杏の黄色が目に眩しい。と言っても、もう葉は半分ぐらい散ってしまっていたけど。もうすぐ冬やな。
そんなことを考えながら、長い廊下をぶらぶらと歩いていると、向こうから僕が佐木から逃げるために利用した沢渡教授がずれた眼鏡を元の位置に戻しながら、歩いてくるのが見えた。見た感じいかにもインテリと言う感じの人で、後ろにきちんと撫で付けられた髪と、アイロンのかかったシャツとズボンから育ちの良さが伺える。歳は五十代前半らしいけど、白髪が多いせいか実際の年齢よりもず

っと老けて見える。
「こんにちは。」
僕はなんとなく教授に後ろめたいような気がして、軽く会釈して挨拶した。
「ああ、津森君かい。どうした？珍しい。君に声をかけられるとは思わなかったよ。私に何か用かい？」
「いえ、別に・・・・。今日はたまたま挨拶したいような気分だっただけです。それじゃ。」
教授は不思議そうな顔をして僕の顔を見たけど、僕はもう一度会釈して通り過ぎようとした。
が、ふいに教授に呼び止められた。
「ああ、そうだ。ちょっと待ってくれないか。君は今暇かね？」
なんやろ。挨拶なんかするんやなかったな。
「ええ。これといって特に用事はありませんけど。何か？」
「実は昼からの講義でＯＨＰを使うんだけどね、悪いが運ぶのを手伝ってくれないか。うちの研究生がどこに行ってしまったのか、誰も見当たらないんだよ。」
僕は内心、面倒くさいと思ったけど次に佐木に見つかったときに逃げるいい口実になると思い、沢渡教授を手伝うことにした。
「いいですよ。次の講義は休講やし、僕も暇してましたから。」
「そうか。悪いね。Ｒ講義棟なんだ。少し遠いが。」
教授は僕にこっちだよと手招きすると、資料室のほうへ足早に歩き始めた。
資料室からＯＨＰを探し出し、Ｒ講義棟（確かに少し遠かった。）の講義室にＯＨＰを設置すると、教授はありがとう。と僕に言い、もしよかったらお礼にコーヒーをご馳走するがと言ってくれた。
特に断る理由もなかった僕は、ありがたくご馳走になることにした。けど、コーヒーをご馳走すると言って、教授の向かった先は構内のカフェテリアではなく、教授自身の研究室やった。
「そこら辺の空いてる椅子に適当に腰掛けてくれ。研究生の奴らが

あまり整理整頓をしないものでね。机の上が散らかってて悪いが。」
いえ、と僕は小さく言うと、木製の小さな椅子に腰掛けた。椅子は背もたれこそ付いていたものの、かなりの年代もので僕が座ると、ぎしぎしと音をたてた。壊れんやろうなこの椅子。
教授は湯用ポットに水道水を注ぎいれると、カセットコンロに火をつけてお湯を沸かし始めた。
インスタントコーヒーかな。案外ケチやな大学教授は。と僕が思っていると、教授は自分のデスクの上の棚から”モカブレンド”と書かれたコーヒー豆の缶と、ペーパーフィルターの箱、ドリッパー、サーバーを取り出し、慣れた手つきでそれらをセットすると、中挽きにしたコーヒー豆を二人分ペーパーフィルターの中に入れた。コーヒー豆の香ばしい香が、鼻の奥をくすぐった。
なんで僕がこんなにコーヒーを入れる器具類について詳しいのかと言うと、高校生の時、土日だけやったけど喫茶店でアルバイトをしていたからや。そこのマスターはなかなか本格派な人で、機械で入れるコーヒーはコーヒーやないと言って、一杯一杯手で入れることにこだわっていた。確かに、その店のコーヒーは他の店よりおいしかったし、そのマスターのお陰で僕も随分コーヒーには詳しくなった。
東京に来てからは、カフェへ行くよりは呑みに行く事のほうが多くなって、コーヒーのことなんて忘れとったな。基本的に面倒くさがりの僕は家でコーヒーなんか淹れへんし、もっぱら缶コーヒー専門やった。教授のコーヒー豆の香を嗅いだ途端、そんなことを思い出して、ふいに僕は懐かしい気持ちになった。
「なかなか本格的ですね。」
僕はペーパーフィルターの中に慎重に湯を注いでいる教授に話し掛けた。研究室の中にコーヒーのいい香が満ち溢れていた。
「ああ、元はと言えば妻がコーヒー好きでね。好きがこうじてこんなに本格的な道具を買い揃えることになったのさ。妻はコーヒーを

淹れる達人だったが、2年前に亡くなってね。それからは自分で淹れているという訳だよ。ずっとうまいコーヒーを飲んでいたら、どうもインスタントでは物足りなくなってしまってね。」

そう言って教授は穏やかに笑うと、コーヒーカップに湯気の立つコーヒーを注ぎいれ、ポーションとグラニュー糖の袋をそれぞれ一つずつソーサーに乗せて僕の前に置いてくれた。

もしかして僕はまずい事を聞いてしまったのかなと思い、ありがとうございます。と言った後に小さくすみませんと、付け加えた。いや、いいんだよというように教授は笑いながら小さく首を振った。

僕はグラニュー糖と、ポーションをコーヒーの中へ入れるとスプーンでかき回して火傷しそうに熱いコーヒーを一口すすった。確かにそのコーヒーはおいしくて、心がほっとするような味だった。

「おいしいです。」

僕は正直に感想を言った。

「妻に比べるとまだまだだよ。自分で淹れ始めて2年がたつが、未だに勉強中さ。妻が生きているときにもっとよくコツを聞いておくんだったな。」

そう言って教授は再び笑った。僕は恐る恐る教授に質問してみる事にした。

「あの、奥さんはご病気で亡くなられたんですか？」

「そうだね。もともと体が弱くて、喘息持ちだったんだ。ある日風邪をこじらせて肺炎になってね。それきりだよ。あっけないもんだった。妻を亡くしてしばらくは抜け殻みたいだったよ。半年ぐらいしてからかな。ようやく現実を受け入れなければと思うようになったのは。」

教授は少し遠い目をして中庭の銀杏の木を見ていた。亡くなった奥さんのことを思い出してるんやろか。なんとなく気まずいな。そんな空気を察したのか教授が再び口を開いた。

「すまなかったね。こんなプライベートな話をしてしまって。ところで、話は変わるがきみの統計学のレポート、今回は良くできてい

たよ。きみには珍しくまとまりがあった。誰かにアドバイスでも受けたのかい？」
「ええ、まあ・・・・。」
僕は曖昧に言葉を濁した。実を言うと、あのレポートはあやの助言によって書かれたものだった。偶然の一致か、大学は違えど僕とあやは同じ学部やった。
多分、二人の頭の程度はどっこいどっこいだと思うけど、文章力については明らかにあやのほうが秀でていた。あのレポートの考察は正直に言うと、あやが書いたんや。
「そうか。友達の誰かかい？」
教授はよっぽどあのレポートのまとめ方が気に入ったんかな。えらくこだわるな。
「まあ・・・、そんなところです。他の大学ですけど、学部がたまたま同じだったんで少し助言してもらったんです。」
僕はまた曖昧な答え方をした。まさか幽霊に助言をしたもらったなんて口が裂けても言えない。そんな僕をなぜか教授はにやりと笑って見ると、
「その友達と言うのは、女の子だね？きみはたいがい言葉を濁したりしないから、嘘をついているのは分かるよ。彼女かい？」
なんでそこまで分かるんや！この人こんなに喋る人やったっけ？僕は教授に出会ってしまったことを激しく後悔した。佐木から逃げる口実に嘘なんかついたからバチが当たったんやろか。
「いえ・・・・。別に彼女とかそういうんじゃないんですけど・・・。まあ友達ですよ。」
僕はまた曖昧に言葉を濁した。この場から逃げ出してしまいたかった。なんでこんな話になったんかな。
「そうか。じゃあそういうことにしておくよ。まあ、もしその娘が好きなら大切にしてあげる事だね。私のように、ああしておけばよかったなんて後悔することだけはいけないよ。やってしまったという後悔よりも、ああしておけばよかったという後悔だけはしないこ

とだ。月並みな意見だが。」
教授はにっこりと笑ってそう言うと、空になった僕のコーヒーカップをさげて研究室の片隅にある小さな流しに置いて時計を見ると、
「おや、もうこんな時間か。お昼休みだな。長いこと引き止めてしまって悪かったね。」
と、少しすまなそうに首をすくめた。
「いえ。コーヒーごちそう様でした。おいしかったです。それじゃあ失礼します。」
僕は一刻も早くこの場から逃げ出したかったので、教授に背を向けるとそそくさとドアのほうへ向かって歩き出した。と、ふいに教授に呼び止められた。
「津森君。」
なんやねん。まだなんかあるんか！
「はい。なんでしょうか？」
僕がいささか迷惑そうに振り返ると、教授はそんなことには気づいてもいないらしく再びにこやかな笑顔でこう言った。
「もしよかったらいつでもここに遊びに来てくれ。またコーヒーをごちそうするよ。」
社交辞令なのか僕のことをいい暇つぶしかと思ったのか、教授の真意は分からんけど、予想もしてなかった誘いに僕は少し動揺した。
「あ、はい。また伺います。」
とっさにこう答えると、僕は一礼して沢渡教授の研究室を後にした。なんなんやろ。奥さんをなくしてから教授も寂しいんやろか。僕だけやなくて色んな学生つかまえて、奥さんの話しとんかもしれへんな。最愛の者を亡くす悲しみか・・・・。
そんなことを考えた瞬間またもやあやの顔が頭に浮かんできた。あかん。僕ほんまに重症や。
亡くすも何も、あやはもう死んでしもてるんや。幽霊やし。けど、もし幽霊のあやが今僕のところから居らんようになったら、僕はきっと死ぬほど寂しいと思う。大げさかもしれへんけど、僕の中であ

やはそれほど大きな位置を占めるようになってるんや。
今、自分で改めてあやへの気持ちを実感した気がしたけど、この不毛な片思いはやっぱり一生僕の心の中にだけしまっておこうと思った。あやに関しては本当にまったく先が見えへんから。
考え事をしながら歩いていた僕の耳に遠くの方で、三限を知らせるチャイムが鳴っているのが聞こえた。僕は我に帰ると、足早に次の講義室へと急いだ。

片思い

6．片思い

四限目の授業が終わると、僕は足早に大学を後にした。特に佐木に見つからないように。

今日は色んなことを考えた一日やったなあ。咲子と久しぶりに話し、その後沢渡教授とコーヒーを飲んで、教授の思い出話に付き合った。

その二つの出来事のお陰で、今日の講義はまったく耳に入ってこなかった。僕の“不毛な片思い”について、延々と自問自答を繰り返していたからや。結局これといった答えは出えへんかったけど、僕は当分この苦しい気持ちを胸に抱えたまま、暮らしていくんやろなと電車に揺られながら考えていた。

確かに苦しい。けど、なぜか僕は幸せな気分でもあった。僕のこの思いがあやに伝わることは無いけど、別にそれでもよかった。今はあやと一緒にいられることのほうが嬉しいから。今日は電車に乗っている時間がひどく長い時間のように思えた。早くあやに会いたかった。

今日はバイトもないし、直接アパートに帰れる。電車の窓の外の飛ぶような景色をぼーっと眺めていると、僕の降りる駅を告げるアナウンスが聞こえてきた。

まだ早い時間やったから、電車から降りる人も少なく僕は足早に改札を目指した。ジーンズのお尻のポケットから定期を取り出し、駅員に見せて改札口を通り過ぎると、見慣れた人影がそこに立っていた。

あやだった。僕はかなり驚いて、思わず言葉を発しそうになったけどそれに気づいたあやが唇の前に人差し指を当てて、僕に喋らないようにという合図をした。

「喋っちゃだめだよ。拓弥。私の姿は拓弥以外の人に見えてないか

ら、一人で話してると変な人って思われちゃうよ。」
そう言ってあやは、茶目っ気たっぷりの笑顔で僕に笑いかけると、お帰り、と言いながら僕のほうに近づいてきた。
なんなんやろか。これが以心伝心っていうやつなんかな。あやに早く会いたいと思っていたら、あやが駅まで迎えに来てくれている。こんなことは初めてやった。僕は嬉しくて、なんて言っていいか分からんかった。多分あやのことだから、どこかへ出かけていて、この駅の傍を通ったからついでに僕を待って一緒に帰ろうとか、多分そういうことだろうとは思うけど、それでも僕は単純に嬉しかった。こんな気持ちは本当に久しぶりや。恥ずかしいけど、小学生のときの初恋みたいな気持ちやった。
僕はにやける顔を何とか抑えつつ、あやと並んで歩き始めた。あやとは毎日顔をあわせているけど、こんなふうに並んで外を歩くのは初めてだった。いや、前に会ってるんだったら初めてとちゃうかな。
手をつなぐ事もできんし、歩きながら楽しく話をするということもできない。それに、ただ駅からアパートまでの１０分足らずの距離を歩くだけや。はっきり言って、デートなんて呼べる代物でもあらへん。それでも僕は夢心地やった。
僕らは肩を並べて、小さな公園の横を通り過ぎ、閑静な住宅街を抜けて急な坂を登った。
夕暮れ時やったけど、周りを歩いている人はおらんかった。坂の上まで来て、あやがふいに僕の服の袖をひっぱった。
「どないしたんや？」
周りに人がいなかったので、僕は言葉を発した。
「ねえ、ちょっと振り向いてみて。」

あやに言われたとおり、たった今歩いてきた道を僕は何気なく振り返った。
僕の眼下には一面オレンジ色の世界が広がっていた。木々も、ビルも、遠くに見える川面も全部オレンジ。それは本当にきれいな光景で、まるで空の上からミニチュアの町を見下ろしているようだった。約2年間大学からの帰宅路となっている道やけど、こんなふうに振り返って街を見下ろしたことは一度もなかったな。僕は何も言わず、ただその幻想的な光景を眺めていた。
「ねえ、きれいでしょう？さっきたまたま散歩してたらこの光景に気づいたの。拓弥はもしかしたら見慣れてる景色かもしれないけど、あんまりきれいだったから、一緒にこの夕焼けを見たいなと思って駅まで迎えに行ったんだ。」
あやはそう言って、僕のほうをみてにっこりと笑った。あやの顔もオレンジ色に染まっていた。自分では見えないけど、多分僕の顔も・・・。いや、僕の顔はオレンジというより真っ赤だったと思う。心臓の鼓動がどんどんと早くなるのを感じた。なんだかこのまま帰りたくない気分やった。
「あのな、あや。僕・・・・」
ふいに胸の奥から思いがあふれ出そうになって、僕は必死でそれをこらえた。
「うん？どうしたの？」
「・・・。いやなんでもない。もう少し散歩して帰ろうか。せっかくの夕焼けやし。」
僕は言葉を濁して、あやの少し前を照れくさい気持ちで歩いた。
「待ってよ。何よ、言いたいことがあるんなら言いなさいよ、気になるじゃない。」
少し小走りであやが僕に追いついてきて、口を尖らせて文句を言った。
「ほんまになんでもないんや。気にせんといてくれ。今日は色々あったから、後であやに聞いてもらおうと思ってな。帰ったら話すわ。

」
「そう？分かったわ。」
あやはなんだか納得がいかないというように首を横へひねるような仕草をしてみせたが、すぐに何事もなかったかのように僕の横で鼻歌を歌いながら歩き出した。あやが僕の部屋にやってきたときに僕が買ってきたあのアルバムＣＤの中の一曲だった。夕暮れをテーマにした曲や。
あやの歌はあまりうまいとは言えなかったけど、自分なりにその曲をマスターしているようだった。
昨日はあんなに泣いてたのに、もうすっかり元気になっている。ほんま女はよう分からん。
「今日はえらい、あやご機嫌やん。なんかええことでもあったんか？」
少しだけ前を歩いているあやの背中ごしに僕は声をかけた。
「別に。特にいいことなんてないわよ。でも人間誰しもきれいな景色を見たら、気分がよくなるものじゃない？ほら、今流行のマイナスイオン効果ってやつよ。きっと。」
「マイナスイオン効果ねえ。なんか違う気がするんやけど・・・。誰もがきれいな景色見たからって、機嫌よくなれるもんでもないと思うけどなあ。それに夕焼けって寂しいイメージがないか？」
僕が笑ってあやに意見すると、あやはいつものごとくほっぺたをぷーっと膨らまして、
「もう、せっかくきれいなものを見せてあげたのになんでそういうこと言うのよ。きれいなものに感じ入ることができない人は、きっとかわいそうな心の持ち主なのよ。それに、私は夕焼けが寂しいだなんて思わない。優しい、あったかい、帰りたいって思うわ。」
「帰りたいってどこに？」
「分かんないけど、そういう感じがするってこと。もう意地悪ね。拓弥は情緒がないんだから。」
あやはそう言うと、本当に怒ってしまったのかそれきり喋らなく

なった。僕らの横を自転車に乗った男の子が通り過ぎていった。あやの長い髪が僕のすぐ横で揺れている。本当にこの娘は幽霊なんだろうか。こうやって僕らは並んで歩いているのに。
僕はふいに気持ちが抑えられなくって、あやの手をぎゅっと握った。いや、握ったつもりだったけど、その手は虚しく宙をかいた。ああやっぱり。そんなこと分かってるはずやのに・・・・。何しとるんやろ僕・・・・。こんな虚しさの再確認して、何になるんや・・・・。
それまで鮮やかに見えていたオレンジが、急にすすけて味気ない色のように思えた。さっきまで僕の心を満たしていた幸福感はどこかに消えて、代わりに悲壮感が僕の心を支配し始めている。
あやが歌の続きを歌っているようだったが、僕には遠いところから聞こえているようで、頭の片隅でぼーっとその歌を聞いていた。
なんで僕幽霊なんか好きになったんやろ・・・・・。前に失敗したから、今度こそは普通の恋愛したかったのに。それなのに、好きになった相手は幽霊。ほんまにどうしようもない。
「どうしたのぼーっとして。」
ふいにあやが話し掛けてきた。
「なんか、心ここにあらずって感じだよ。何か悩み事でもあるの？」
「い、いや、なんでもない。ちょっと考え事しとっただけや。」
突然あやに話しかけられて、僕はたじろいだ。
「何考えてたの？悩みがあるんなら、私が相談にのってあげようか？昨日、私の話聞いてもらったから、何でも相談に乗るよ。こう見えてもけっこう友達の相談とか受けてたんだから。」
そう言って、あやは心配そうに僕の顔を覗き込んだ。あやのきれいな顔がすぐそこにある。そんなささいなことでも僕はどきどきしてしまう。まさか本人に相談できる訳がない。僕はあやのことが好きなんやけど、あやは幽霊やしどうしたらええんかな？なんて、そんなんいえるか。
「ほんまに何でもないんや。大丈夫だから。」

「大丈夫じゃないでしょ。さっきの拓弥すごく怖い顔してた。なんか思い詰めてたみたいだったよ。私、拓弥の力になりたいの。私のこと見えるの拓弥だけだし、幽霊の私に拓弥は部屋にいてもいいよって言ってくれた。昨日も言ったけど、私ほんとに嬉しかったの。だから、そのお礼じゃないけど、この夕焼け一緒に見たいなって、拓弥に見せてあげたいなって思ったの。」

あやの表情は真剣だった。ほんまに僕の事心配してるみたいや。でも、これを言ってしまえばあやは僕の部屋から出て行ってしまうかもしれへん。それだけは絶対に嫌や。あやが居らんようになるやなんて、考えられへん。

「ほんまになんでもないんや。レポートのことで教授に呼び出しくらってな。再提出になったんや。それで、どうしたもんかなーと。」

僕はとっさに嘘をついた。すると、とたんにあやの表情が曇った。

「それって、私の手伝ったやつよね？どこが駄目だったの？自分ではよくできたと思ったんだけど。ねえ、どこが駄目だって言われたの？」

「あ、いや、うん。どこって、そんなにひどく怒られたわけじゃないから。あやの手伝ってくれたところは大丈夫やってんけど、その、僕のまとめたとこがな・・・その・・・・。」

あかん。僕は嘘をつくんが苦手なんや。まさかあやがこんなに追求してくるなんて思いもせんかった。佐木みたいに簡単にはいかんな。どなんしよう。嘘ばれたかな。

恐る恐るあやの表情を伺うと、案の定眉間にしわが刻まれ始めている。

「ねえ、なんで嘘つくの。そんなに私のこと信用できない？そんなに言いたくないんなら言わなくたっていいわよ。でも、なんで嘘つくの？私、嘘つかれるの大嫌いだし、嘘つく人も大嫌いなの。もういいわ。私もう少し散歩して帰るから、拓弥は先に帰ってよ。」

そう言ってあやは僕にくるりと背をむけると、アパートとは逆方向に歩き出した。

「なあ、あや待てや。どこ行くねん！もう暗なるで。帰ろうや。嘘ついたことやったら謝るから。なあ！」
どんどんと遠くなるあやの背中に向かって僕は呼びかけたけど、あやはそれを無視してどんどんと歩いていく。買い物帰りのおばさんが僕のことを妙なものを見る目つきで見て通りすぎた。
なんやねんほんま・・・・・。人の気も知らんと。僕はだんだんと腹が立ってきて、あやをおいかけようとはせず、アパートへの道をずんずんと歩いた。
嘘ついたんはぼくが悪かったかもしれへんけど、人には言いたくない事の一つや二つあるもんやんか・・・・・。それぐらい解かれよ。なんやねんあいつ・・・・。
心の中でぼやきながら歩いていると、いつのまにかアパートに着いていた。二階の端の僕の部屋の灯りはついていない。当然のことながらあやは帰っていないらしい。
僕は腹の立つのと、虚しいのとの半々の気持ちで階段を乱暴に上がった。ほんま腹立つ。なんであれぐらいのことであんなに怒るんや。たいしたことやないやんか。僕ら付き合ってるわけでもないし。
部屋の前に着いて、僕はイライラしながらバッグの中の鍵を探したけどなかなか見つかれへん。ほんますべてにイライラする。
ようやく鍵を見つけると、僕は玄関のドアを開けた。ふっといい匂いが鼻をくすぐる。今日はカレーか・・・・。うまそうな匂いやな。あやが作っといてくれたんやな・・・・。カレーの匂いで僕の怒りは少し治まって、なんで僕もそこまで怒る必要があったんかと冷静になってきた。
確かにあやは怒り過ぎのような気もするけど、僕も嘘ついたんはあかんかったな。あやはほんまに僕の力になろうとしてくれとったのに、そんなあやの気持ちも考えんと曖昧な言葉でごまかしたんは僕が悪い。もう少し真剣に、今は言われへんけどいつか言うって言えばよかった。いつかは分からんけど・・・。あやが帰ってきたら素直に謝ろう。けんかはやっぱりいいもんやない。

腹が減った僕はとりあえず夕食を食べる事にした。鍋にはカレーと、ご飯も炊けてる。冷蔵庫を覗くと、サラダが作ってあった。僕の好きなポテトサラダや。

ご飯とカレーを皿によそって、テーブルに置いて「いただきます。」と小さく呟くと、僕はカレーをほうばった。

うまい。大げさかもしれへんけど、今まで食べたカレーの中で一番おいしいような気がする。好きな娘が作ってくれたからかな・・・・。あやが目の前におってくれたらもっとおいしかったのに。

僕は少し寂しい気持ちで一人カレーを食べた。おいしかったけど食欲はなく、一杯だけにしておいた。あやの帰ってくる気配はなかった。

僕が夕食の片付けをすまし、テレビを見て、今日の講義のレポートをまとめる頃になってもあやは帰ってこんかった。僕は何気なく時計に目をやった。もう9時か。どこ行ったんやろ。

ふいに僕の胸に不安が湧き上がってきた。まさかあやは、もうここへは帰ってこんつもりなんやないやろか・・・・。すぐに怒るあやの事やから、すっかり僕に怒ってしまってここには帰りたくなくなったら・・・・。それは嫌や。まだ僕はほとんどあやのこと知らんのに。ずっと一緒に暮らせないことなんか知っとる。僕の気持ちを伝えることができんのもしょうがない。

でも今はまだ一緒にいたいんや。もっと一緒に色んなことがしたい。馬鹿な話で笑ったり、音楽聞いたり・・・・。あやがここにおってくれるだけでいいんや。僕はそれだけで嬉しいから。

そんなことを考えると、いてもたっても居られなくなって僕は部屋の鍵を手にとると勢いよく玄関のドアを開けた。まではよかったが、危うくひっくり返りそうになり玄関にどすんと尻餅をついた。

なんで僕がそんなに驚いたのかというと、ドアの前にあやが座っていたからや。もちろん勢いよく開けたドアはあやに当たることはなく、あやの体を素通りしただけやったけど。

「ずいぶん急いでるみたいね。どこ行くの？」

いつもにも増してぶすっとしたしかめっ面の顔であやが僕に話しかけた。僕は尻餅をついた尻をさすりながら立ち上がると、やっとの思いで口を開いた。
「あやが帰ってこうへんから心配して探しに行こうか思て。なんや帰って来てるんやったら、さっさと入ってきたらええやないか。いつからここにおったんや？」
あやはすっと立ち上がると、僕の言葉を無視して部屋に入っていった。どうやらまだ怒っているらしい。そして、僕に背を向けてベッドへ潜り込んだ。ふて寝かいな。ほんまかなわんわ。
「なあ、あや。僕が悪かったわ。ごめんな。あやは僕のこと心配してくれて親切に僕の悩みを聞いてくれようとしたのに、嘘でごまかすようなまねしてごめん。聞いとるんか？」
あやからはなんの返事もない。黙ったままや。
「僕とは話したないん？ほな黙ったままでいいから聞いててくれ。僕にかていいたないことの一つや二つはあんねん。それはあやにも分かるやろ？いつか言えたらいうから。な？」
相変わらずあやは黙ったままやった。今は何言うてもあかん気がする。いったん引くとするか。
「あやはもう寝るんか？カレーごちそう様。おいしかったで。ほな僕レポートの続きしんとあかんから。おやすみ。」
僕は黙ったままのあやの背中に話しかけると、さっき書きかけだったレポートの続きに取りかかった。あやがこんな状態やから、今日はあやに手伝ってもらうわけにもいかん。こりゃ夜中までかかりそうやな。まあ明日になったらあやの機嫌も直っとるやろ。さあがんばろ。今日は二つ仕上げんとあかん。締め切りは明日や。
僕は気合を入れ直すと、三度レポートに取り掛かった。

喧嘩

7．喧嘩

携帯電話のアラーム音がけたたましく鳴っている。なんやうるさいな。

結局昨日はレポートを仕上げるのに夜中の1時過ぎまでかかってしまい、ベッドに入ったのは2時前だった。今何時や？7時半・・・・！なんやこれ講義に間に合うギリギリの時間やないか！もし起きられなかったときのためのぎりぎりのアラームが僕の耳元で鳴っていた。

なんでや。あや起こしてくれへんかったんか。いつもやったら朝ごはん作る前に起こしてくれるのに。あわてて布団から飛び起きると、すでにあやの姿は部屋にはなく、もちろん朝食も用意されてはいなかった。

僕は急いで服を着替えて、昨日仕上げたばかりのレポートをかばんに放り込むと、顔も洗わずにボサボサの頭で部屋を飛び出した。

駅までの道すがら走りながら、僕は本当にあやに腹が立った。なんやねんあいつ。まだ怒ってるんか。僕は昨日謝ったやないか。これ以上どうしろっちゅうねん。こんな嫌がらせして何が楽しいんや。もう知らんあんな女。勝手にしたらええねん。ほんま腹立つ。

講義に間に合うギリギリの満員電車に乗り込むと、たくさんの人に押しつぶされて息ができないぐらいやった。いつも通り、もう少し早い電車に乗れていたらこんなに不快な思いをすることはなかったのに。全部あやのせいや。

大学の近くの駅に着くと、僕は大学までダッシュした。正門に入ったときに予鈴が聞こえた。よりによってこんな日に一番遠いR講義棟や。はよ行かな間にあえへん。今日は代返の通用せん三井教授の授業やのに。僕が息を切らして講義室に入った時には壁の時計は9時一分前を指していた。やった。なんとか間に合った。

後ろのほうの席で佐木が手招きしている。どうやら僕の席を取ってくれていたらしい。妙なところで気が利く奴や。僕は佐木の横へどかっと座ると、ふーっと大きなため息をついた。
「おはよう。おまえがぎりぎりに来るなんてめずらしいな。寝坊か？」
「ああ、レポートやってたら寝るのが遅くなって、おまけに起こしてくれへんかったから・・・・・。」
ここまで話して僕はしまったと思った。案の定、知りたがりの佐木は聞き逃してはくれへんかった。
「起こしてくれへんかった？なんだおまえ彼女でもできたのか？聞いてないぞ俺は。」
まずい。うっかり口が滑ってもうた。僕がどう言い訳しようか考えていると、頭が禿げて小太りの三井教授がのそのそと講義室に入ってきた。
「佐木その話はまた今度な。私語が三じいに見つかったら単位くれへんぞ。」
僕が小声で佐木に言うと、佐木はちぇっと小さく舌打ちしてしぶしぶ教科書とノートを開いた。
佐木には悪いけど、三井教授のおかげで助かった。またあれこれと詮索されるのはうっとおしい。
三井教授の講義は、ぶつぶつと小声で喋るので相変わらず何を言っているのか分からなかった。退屈な９０分をやり過ごすと、次の講義室への移動中すかさず佐木が話しかけてきた。
「それで、さっきの話の続きだけどさ、誰が起こしてくれなかったんだ？正直に言えよ。俺とおまえの中で隠し事もないだろ。」
そんなに仲良くなった覚えはないんやけどな。ここはなんかうまい言い訳を考えな。
「あー、それはないつも鳴るはずの時間に携帯電話のアラームが鳴らんかったんや。なんか時間の設定間違えたみたいでな。起こしてくれへんかったっていうんは携帯電話が起こしてくれへんかったっ

てことや。おまえの言うようないいことやないよ。」
「ほんとか？あやしいな。おまえ最近付き合い悪いからな。合コンに誘っても来ないし、講義が終わったらさっさと帰るしなあ。ほんとは彼女が部屋で待ってるんじゃないのか？」
「まあ好きなように想像してくれ。僕には彼女はおれへんから。」
僕は今朝の出来事を思い出し、少し怒り気味に佐木に言い返した。そうや嘘をついてるわけやない。あやはただの同居人で彼女でもなんでもないんやから。僕が一方的に片思いしてるだけや。
「分かったよ。そんなにむきになるなよ。おまえがそんなに怒るんだったらいないことにしといてやるよ。」
佐木は決まり悪そうにぶつくさ言うと、自分の講義がある別の棟へと向かっていった。２限目は佐木と選択している授業が違うので、棟が別々や。僕は少しほっとして自分の講義が行われる講義室へ入った。
佐木にはちょっと悪い事したかな。自分がイライラしてたからって、あいつにあたるようなこと言うてしもうて。でもあいつも悪いんや。人のことを根掘り葉掘り聞くから。
次の講義はあの沢渡教授の授業やった。講義の終了後にレポート提出やったけど、そのとき教授は小声で「今回のレポートも楽しみにしてるよ。きみの優秀な友人からどんな助言をもらったのかね。」と僕に言ってきた。「今回はそんなに期待せんといてください。」と、僕も小声で返した。
期待したってしゃあない。今回あやはノータッチやねんから。僕の下手くそなまとめ方しか見られん。
この日は講義がみっちり４限まであって、大学を出る頃には５時を過ぎていた。今日は６時からバイトがあるのに急がんと。
僕のバイト先のホテルは大学から歩いて２０分くらいのところにある。けっこう大きくて有名なホテルで、たまに芸能人も来たりするけど、僕はしがない配膳のバイトなのでそういう人たちにサービスをしたことはない。もっぱら僕の仕事は、大きなパーティや宴会

などの場に料理を運んだり、グラスや皿を下げたりすることや。今夜も大きい宴会が五つ入っとる。
自給がいいのであまり文句は言いたくないが、けっこうきついバイトや。去年の夏休みなんか、１５時間帰らせてくれん日があったぐらいやから。
それでも、バイト仲間がみんないいやつばかりなのと（みんながみんなじゃないけど）、賄いがついていて食費が助かるのとで、もう一年以上は続けている。今日は最終のパーティーが１０時まであるので、バイトが終わるのは１２時を過ぎてしまうかもしれない。
あやは部屋に帰ってきたやろか・・・・。会場のテーブルセッティングをしながらまたそんな事を考えてしまう。あんなにあやにむかついとったはずやのに。ほんまどこ行ったんや。まさかもうあの部屋には帰ってけえへんつもりなんかな・・・・。
頭の中で不安なことが次々とよぎる。そのとき、誰かにバシンと背中を叩かれた。
「よう、津森。何ボーっとしてるんだ？ナプキンの置き位置が逆になってるぞ。」
少し垂れ目がちの人の良さそうな笑顔が僕のすぐ後ろにあった。
「あ、いえ。なんでもないです。ちょっと考え事してて。」
僕はごまかし笑いをすると、急いでナプキンを元の位置に戻した。
野尻竜馬はそうか、と笑顔で言うと相談事があるならいつでも言えよと、自分の持ち場に戻って行った。僕はふと、野尻さんに相談してみようかと言う気になった。
野尻さんは僕がこのホテルに来る以前からここでバイトをしていた人で、僕より二つ上の大学４年生だ。成績はかなり優秀で、大学卒業後は某有名大学の大学院に進学が決まっているし、見た目も悪くない。かといって、性格も気取りがなくみんなから慕われている。
僕も野尻さんのことは好きだった。実は咲子のことも野尻さんにだけは相談していた。咲子と別れた後、元気出せよと呑みに連れて行ってくれたのも野尻さんだったし、僕がミスしたときもかばって

くれたりと、何かと世話になっている。
野尻さんなら佐木のように詮索してくることもないし、きっと的確なアドバイスをくれる。
そうや。野尻さんに相談してみよう。もちろんあやが幽霊ということは言うわけにいかんけど。あの人、恋愛経験も豊富そうだし、秘密を喋ったりするような人じゃないからきっと大丈夫や。
そう思うと、あやのことで鬱々としていた僕の心は少し楽になった。
僕は黙々と仕事を終わらせると、野尻さんのいる宴会場へと向った。会場の用意さえ早くしてしまえば、パーティが始まるまでに空き時間ができる。
野尻さんは今終わったばかりのパーティ会場の片付けをしているところだった。
「野尻さん、ちょっとええですか？」
「おう、どうした津森。」
「野尻さん、今日ラストまで入ってますよね。もしその後予定がないんやったら一緒に呑みに行きませんか？ちょっと聞いて欲しい話があって・・・。」
僕が少し遠慮がちに言うと、野尻さんは小さく肩をすくめてみせて、
「聞いてやりたいのはやまやまなんだけど、この後コンビニのバイトが入ってるんだ。悪いけど今度でいいか？」
と、本当にすまなそうな顔で言った。
「あ、いえ。それやったらええんです。そんなたいしたことちゃうし。バイト頑張ってください。」
僕はそう言って軽く頭を下げると野尻さんのいるパーティ会場を後にした。
そういえば野尻さんは、家の事情で学費が出してもらえずに奨学金とバイトで大学に通ってるんだったな・・・・・。
僕は何だか肩透かしをくらったような気分で自分の持ち場である

会場に戻った。この苦しい胸の内を誰かに聞いて貰えると思っていたので、僕の心は暗く沈んだ。ちょっと大げさやけど。

その後僕はうわのそらで仕事し、2，3ミスをしてその会場の責任者である社員の人にどやされたけど、それもあまり耳には入ってこんかった。そんな調子でバイトを終えるともう12時を回っていた。

僕がバイトの仲間たちに別れを告げ、裏の通用口から出ようとしたときだった。

ふと、目線の先にあやに似た女の姿が写った。後姿だったので、よくは分からなかったが背中の中ほどまである長い髪、華奢な体つきがあやにとても似ているような気がした。

まさかな。あやがこんなところにおるわけないよな・・・・。確かに僕のバイト先は言ってあったけどあんな喧嘩をした後やし、謝ったにも関わらずあやは僕のことを許してくれてへんみたいやし・・・。

多分気のせいやと、自分に言い聞かせると僕は足早に駅への道を歩いた。

もしかしたらあやが部屋に帰って来てるかもしれへん。まだ怒ってるやろか。ほんまに女は面倒くさい。自分かて悪いところがあるのにいつも謝るんは男からや。友達の話を聞いてても、喧嘩の原因はだいたい彼女やのに先に謝るんは男のほうが多い気がする。まあ人それぞれなんやろうけど。

やっぱり、惚れた弱みっちゅうやつかな。僕もう一度あやに謝ってみよう。朝、僕が起きる前から部屋におらんかったから、さすがに帰ってるやろ。

改札口を大またで通り抜け、僕は今ホームに滑り込んで来たばかりの電車に飛び乗った。もう時間が遅いからか、電車の中は人もまばらで空いている。一息ついて座席に座り込むと、一日の疲れがどっと体を支配した。

僕は電車の窓に頭をもたせかけると、昨日からの出来事を反芻し

た。
　あやと喧嘩して、朝起きたらあやはおらんかって学校に遅刻しそうになった。それから大学行って、バイト行って、後なんやったっけ・・・・・。僕の意識は少し睡魔に支配されかけていた。ああそうや。野尻さんにあやとのことを相談しようと思ったら、野尻さんはバイトがあってあかんかって・・・・。
　あれ、そういえば野尻さんはＡ学院大学やなかったか？確かそうや。あやと同じ大学やんか。もしかしてあやのこと知ってるわけ・・・ないか。あの大学にどれだけ生徒がおるんや。まして学年も違うしな・・・・。そんなことを考えながら、僕の意識はだんだんと遠くなっていった。
7．以心伝心
　ゴン！と音がして僕が後頭部の痛みで目を覚ますと、車内アナウンスで僕の降りる駅の名前がアナウンスされていた。どうやら寝ていて後ろのガラスに頭を思いっきりぶつけたらしい。
　僕は痛む頭をさすりながら、電車を飛び降りた。危ない危ない。寝過ごすところやった。
　駅の改札を抜けると、僕は早足で家路を急いだ。あやが帰ってることを願って。
　アパートの近くまで来て、一番端の自分の部屋の窓を見てみたが灯りは付いていなかった。僕の心はその部屋同様重く暗いものに支配された。あやはまだ帰ってへんのかな・・・・。
　いや、もう寝てるのかもしれへん。きっとそうや。だから部屋の電気が消えてるんや。そう自分に言い聞かせると、僕は階段をわざとゆっくり上った。正直な話、部屋のドアを開けるのが怖かった。
　もしあやがいなかったら・・・。僕はどんだけヘタレなんや。ほんまに自分がいやになる。
　鍵穴に鍵を差し込みガチャリと回してドアを開けた。部屋の中は真っ暗で静まりかえっている。あやのいる気配はなかった。
　僕はがっくりと肩を落とすと、くたびれたスニーカーを脱ぎ部屋

の電気を付けた。やっぱりあやの姿はどこにも見当たらなかった。
どこいったんやあや・・・・。そんなに僕のことが許せへんかったんか・・・・。それとも何かあったんやろか。いや、そんなわけはない。あやは幽霊や。しかも見えてんのは今のところ僕だけやし、事件とか事故とかに巻き込まれてるなんてことはまずないやろ。やっぱり自分の意思で帰ってないんや。
情けない話、僕は正直泣きたくなってきた。あやのおらん部屋に帰るのがこんなに寂しいなんて考えてもみんかった。あの満月の夜あやが僕の部屋にやって来てから、あやのいる生活は僕の一部のようになってしもうてたんや。
僕はあやと喧嘩したことを死ぬほど後悔した。なんだか心がからっぽになってしまったような気がする。もしかすると、あやはここには帰って来ないかもしれない。僕はなんとも言えない沈んだ気持ちで、肩に掛けていたバックをどさりと机の上に置いた。
その時だった。昨日レポートを書いてちらかしっぱなしの机の上に、「拓弥へ」と書かれた書置きを見つけたのは。
僕は慌ててその紙を手に取ると、もう一度よく見直した。それは僕が昨日散らかしっぱなしにしていたレポート用紙に書かれていた。二つ折りにされて綺麗な字で「拓弥へ」と書かれている。間違いなくあやの字やった。
僕は恐る恐るその紙を開いてみたが、本当は読むのが怖かった。だってそれは別れの手紙かもしれへんから。けど、これを読まんと何も解決せえへんような気がして僕はしっかりしろと、自分に言い聞かせると手紙を読み始めた。
拓弥へ
あなたがこの手紙を読んでるってことは、私はきっとそこにはいないわね。別にこの部屋を出て行ったわけじゃないの。ただ少しの間留守にするね。
それと、昨日はごめん。せっかく謝ってくれたのに素直になれなくて。私の性格は知ってるよね？私が今ここにいないのはケンカし

たことが原因じゃないから。あんまり自分を責めないで。どうしても、やらなきゃいけないことがあるの。今は話せないけど、帰ったら必ず話すから。
いつも迷惑かけてごめんね。最後にひとつだけ。
拓弥のことが好きだよ。多分初めて会ったときから。幽霊の私にこんなこと言われても、拓弥を困らせるだけのはわかってる。でも、きっと顔を見ると言えそうにないから・・・・。
気持ちを伝えたかったの。必ず帰るから。そしたら拓弥の気持ちを聞かせて。待っててね。では。

あやより

手紙を読み終えた僕の心臓は、今までにないぐらい早い鼓動を刻んでいた。あやが僕のことを好きやって？そんな奇跡みたいなことがあるんか？やらなきゃいけないことってなんや？僕の知らんところで何が起こってる？
何だか色々なことが書かれ過ぎていて、僕の頭の中は一瞬パニックになった。取り合えず落ち着かんと。僕は深呼吸をするとベッドの上に座りなおして、もう一度あやの手紙を読み返した。
必ず帰るからと、手紙には書かれている。けどこの内容やったら、もう会えないような意味に取れなくもない。もう会えないかもしれないから、自分の気持ちを伝えておくと・・・・。
あやはずるい。突然僕の前に現れて、僕の心の大部分を占める存在になったのに、僕がその気持ちを伝える前に自分の気持ちだけ伝えていなくなるやなんて・・・。反則やこんなん。ほんまにずるい。
僕は心臓を鷲づかみにされた気分やった。僕かてあやのこと好きやのに、なんで伝えられへんねん。
僕ら両思いやんか。もう幽霊とかそんなん関係ない。そんなことは考えたってしゃあない。今大事なんは二人の気持ちや。
そんなことに気付いたって、全部後の祭りやった。あやがどこにいるかなんて、僕には検討もつかんかった。今すぐ部屋を飛び出し

てあやを探しに行きたいのに、どこを探していいか全く分からない。
いつもあやが出掛けるとき、その行き先を聞いたらあかんような気がして、僕は一切聞かへんかった。僕はアホや。ケンカになってでもいいから聞いとけばよかった。
なんぼ後悔したって、後悔先に立たずや。僕は自分の馬鹿さ加減を一人責め続けた。その時、ふとあることを思い出した。そうや！あそこに行けば何か分かるかもしれへん。
僕は自転車の鍵を引き出しから探し出すと、勢いよくドアを開けて部屋を飛び出した。急いで部屋の鍵をかけ、階段を走って下りると携帯電話の画面を見た。深夜１時４０分。帰りの電車は無いから、やっぱり自転車やな。
僕は自転車置き場に置いてある自分の自転車の鍵を開けると、自転車に飛び乗り力強くペダルを漕いだ。秋の夜風が少し火照った頬に気持ちいい。もうすぐ冬やなと、白くなる自分の息を見て思った。
こんな寒空の下、あやは何してるんやろう。僕はあやの顔を見たくて仕方なかった。
怒ったときに膨れっ面で僕を睨む顔、笑ったときに大きく口を開ける癖、短気で自分の気持ちに正直なところ、歌がうまくないのに歌うのが好きなこと・・・・。そんなあやの全部が好きや。いつかはきっと別れの時が来るんやろう。けど、今は・・・・。今はあやと一緒にいたい。僕はただあやが好きなんや。生きてても死んでても。何でもいい。そばにいてくれたら。
あや、あや、あや。何度も心の中であやの名前を呼んだ。そうすればあやに聞こえるような気がして。そんなことあるわけないのに。
２０分ほど自転車をこぎ続けただろうか。僕の目的地が見えてきた。そう、さっきまで僕がバイトをしていたホテルや。
どこを探そうにも心当たりのない僕は、唯一の手がかりであるこの場所にやってきたんや。つい１
時間ほど前にここで見かけたあやに似た女の子はやっぱりあやだったような気がして。

僕は乱暴に自転車を路地裏へ投げ出すと、あやらしき女の子の姿を見かけた辺りへ行ってみた。
もしかしたらまだその辺にいるかもしれへん。僕は息を切らしながら必死でその辺りを探し回った。
でもあやらしき姿はまったく見つからへん。あかん。遅かったんや。もしかしたらあれはあやかもしれへんかったのに！ほんまに僕はあほや！どうしようもないあほや。なんであのとき追いかけへんかった。声をかけへんかったんや！もう嫌や。こんなん。なんでこんなしんどいねん。なんでこんなに後悔ばっかりやねん！どこいったんやあや。お願いや。帰って来てくれ。僕のとこに・・・・。
僕は泣きたいのを必死にこらえてその場にしゃがみこんだ。
「あれ？津森じゃないか。どうしたこんなところで？何やってんだ。お前帰ったんじゃなかったのか？」
聞き慣れた声に出かかっていた涙を急いで飲み込んで、僕は何事もなかったかのように立ち上がって振り向いた。
　野尻さんの笑顔がそこにあった。

恋愛相談

8　恋愛相談

「あのちょっと忘れ物したみたいで・・・・。見に来たんですけど、僕の勘違いやったみたいです。野尻さんはどないしたんですか？コンビニのバイトに行ったんとちゃうんですか？」

僕はそこまで出かかっていた涙を必死にこらえ、何事もなかったかのようにきわめて普通の態度を取り繕った。

「ああ、実はな、さっきここのバイトが終わったときにコンビニのバイト友達から電話がかかってきてさ、なんかシフトを代わってほしいって言うんだよ。今日代わりに出るから、明日と代わってくれってさ。まったく勝手な話だよなあ。で、今日はこの後、急きょ暇になったってわけだ。」

野尻さんはそう言って肩をすくめてみせた。

「そういえば津森、なんか俺に相談があるって言ってなかったか？コンビニのバイトは無くなったし、こんな時間でもよかったらこれから居酒屋でも行くか？」

どうやら野尻さんは、僕の相談の話を覚えてくれていたようだ。

「でも、こんな時間やし・・・。明日も大学あるんやないですか？僕は2限からやからええけど・・・。」

僕が少し申し訳なそうに口ごもると、野尻さんは相変わらずの人のいい笑顔で笑いながら言った。

「そんことは気にするな。俺も仕事終りに一杯やりたいと思ってたところなんだ。付き合ってくれよ。」

そう言って僕の肩をポンとたたいた。僕はなんだか申し訳ないという気持ちとやっぱり野尻さんにこの苦しい胸の内を聞いてほしいという気持ちがごちゃまぜになっていたけど、せっかく気を使ってくれた野尻さんに悪いと思い、行こうかという気になった。

もちろん、あやの行方が心の大部分を占めていたけど、今の僕に

はどこをどうやって探せばいいか分からなかったし、どうすればいいのか皆目見当もつかなかった。
「分かりました。ほなお願いします。」
僕はそう言って、ちょっと自転車取ってきます。と、野尻さんに言うてから路地裏へ放り出したままの自転車を起こして、野尻さんのところまで押して行った。思いっきり放り出したせいか、自転車の籠が少しへしゃげていた。
姉ちゃんになんか言われそうやな。この自転車は姉のお古だった。僕がのろのろと自転車を押して行くと、野尻さんは煙草を一服しているところだった。野尻さんが煙草を吸っているところを初めて見たような気がする。
「すいません。お待たせしました。」
「おう、じゃあ行くか。」
野尻さんは吸っていた煙草を携帯灰皿に押し潰し、それをズボンのポケットへ入れると僕と並んで歩き始めた。
「野尻さんって、煙草吸うてましたっけ？」
僕はなんとなく話のネタとして聞いてみた。
「珍しいか？普段はあんまり吸わないからな。たまに無性に吸いたくなるときがあるんだよ。別にヘビースモーカーってわけじゃないんだけどな。今は吸いたい時期かな。」
「そういうもんですか。僕は煙草吸うたことないからよう分かりませんけど、美味しいですか？」
「あんまり美味しいもんじゃないけどな。何となく落ち着くというか、気分転換みたいなもんだ。煙草吸うのにそんなに特別な理由なんてないさ。」
野尻さんはそう言って、お前も吸ってみるか？と僕に煙草の箱を見せた。僕はどんなものか興味はあったけど、遠慮しときます。と、丁重にお断りした。煙を吸うんってなんか変な感じや。
その後も僕らは取り留めのない会話をして、２４時間営業の居酒屋へ入った。

平日の深夜にも関わらず店内はわりと混んでいた。僕らはカウンターの端のほうに空いている席を見つけると、そこへ腰かけた。
とりあえずビールと枝豆を注文する。野尻さんはよっぽど喉が渇いていたのかビールが運ばれてくるなり一気に飲みほした。
「で、お前の悩み事ってなんなんだ？今夜はとことん聞いてやるぞ。」
相談にのって下さいと言ったものの・・・・。いったい何から話せばいいんやろう。自分から言い出したことやのに、あやが出て行ったことを少し冷静に受け止められだした僕は、あのときのどん底まで落ち込んだときに後先考えず野尻さんに悩み事相談を申し出たことを後悔し始めていた。
やっぱりあやのことは人には言ったらあかんような気がする・・・・。それが誰であってもや。現に僕はこの夜のことを後に死ぬほど後悔することになる。
でも、バイトで疲れてるところを僕のためにこうして時間を作ってくれたんや。それにやっぱり誰かに聞いてもらって自分の気持ちをすっきりさせたいというのもあった。
「あの・・・。誰にも言わんって約束してもらえますか？ものすごい個人的なことなんで・・・。」
僕が話しにくそうに口ごもると、野尻さんは、分かったよ。誰にも言わないって約束する。と、言ってくれた。
「僕、実は今好きな女の子がおるんですけど、悩み事っていうのはその子のことなんです。」
僕はそう言うと野尻さんの顔をちらりと見た。案の定というか、思った通りというか、ものすごく以外そうな表情だった。僕そんなに女の子に興味なさそうに見えるんかな。
「へええ、そうか。以外だったよ。でも俺嬉しいよ。咲子ちゃんと別れてから、お前全然恋愛する気なかっただろ？すっかり女性不審になったのかと思っててさ。津森さあ、気付いてないかもしれないけど、けっこう女の子に人気あるんだぜ。そうだよなー。失恋の痛

手を癒すのはやっぱり新しい恋だよ。」
野尻さんは本当に嬉しそうにそう言うと、2杯めのビールを注文した。
僕が女の子に人気あるって？そんなん嘘や。
「野尻さん、別に励まそうとしてくれんでもええです。僕は自分がモテへんってことぐらい分かってるつもりですから。」
「そんなことはないぞ？ほらバイトのS女子大の沙織ちゃんいるだろ。あの子津森のことかっこいいって言ってたぞ。」
「ああ、こないだ入ってきたばっかりの・・・。僕ああいう派手な子はちょっと・・・。それより本題に戻ってええですか？」
「ああ悪かった。話がだいぶ逸れたな。で、どんな子なんだ津森の好きな子って。」
さてどういうふうに話そう。とりあえず、あやが幽霊やってことは言えんから、適当に話を作るしかない。
「あの・・・話せば　長くなるんですけど、ずっと前に1回会ったことのある子なんです。それが最近になって偶然再会して、それから何度か会ううちに少しずつ好きになってきて・・・。それがこないだ喧嘩して、その後手紙を残して僕の前から姿を消したんです。僕のことを好きだっていう手紙を残して・・・・・。」
そこまで言って僕は俯いてしまった。誰かに聞いてもらうことで気持ちが楽になるだろうと思っていたけど、その逆やった。改めて口に出して野尻さんに話したことで、認めたくない現実が重く心に圧し掛かってきた。そうや、あやはもう僕のところにはおらん。もう会えんかもしれん。
なんで誰かに聞いて欲しいなんて思ったんやろ。聞いてもらってどうなるもんでもないのに・・・・。
野尻さんも黙ったままやった。僕の落ち込みようをみて、なんて言っていいか分からんのやろう。
周りの客のがやがやという声だけがきこえてくる。長い沈黙を破って野尻さんが口を開いた。

「なあ津森、俺はその子がどんな子なのか全然分からないし、二人がどんな会い方をしてたかも分からないけど、その子はきっとまたお前のところに帰って来ると思うぞ。気休めでこんなこと言ってるんじゃない。その子はお前に好きって告白していなくなったんだろ？何度も会ってたぐらいだから、向こうもお前の気持ちを薄々は気づいてたはずだ。自分がいなくなってお前が困るってことは分かっていただろう。向こうもお前もお互いを必要としてる。だからきっとまた帰って来るさ。信じて待っててやれ。お前の好きになった子だ。信じるに値する相手だろ？」

野尻さんは静かにそう言った。

そうや。手紙にはきっと帰って来ると書いてあった。僕が信じなくてどうする。はっきり言って、あやのことは分からないことのほうが多い。けど、分かってることも多い。単純で、短気で率直で真面目で・・・・。あやが嘘をついたことはない。あやがおらんようになった今、探す場所も分からない僕にできることは待つことしかない。ただ闇雲に探しても焦る気持ちが大きくなるだけや。

そんな単純なことになんで僕は気付けへんかったんやろう。今夜、野尻さんに話して本当によかったと思った。不安な気持ちが消えたといえば嘘になる。けど、あやの手紙に書いてあることを信じてみようと思えるようになってきた。僕は顔を上げると、野尻さんの方へ向きなおった。

「野尻さん、ありがとうございます。僕、誰かにそういうふうに言うて欲しかったんやと思います。彼女の行方ばっかり気になって、信じることができんかった。僕待ってみます。彼女が帰って来るの。」

そうか。と、野尻さんは安心した顔で言うと、今運ばれてきたばかりのビールを一口飲んだ。

「それにしてもそこまで津森を夢中にさせる女の子ってどんな子なんだ？気になるなあ。教えてくれよ。俺には聞く権利あるだろ？」

野尻さんから助言を得たことで、僕の心は少し軽くなっていた。

野尻さんになら話してもええかな。
「すごい気が強いんですよ。短気というか・・・・。でもそれが一緒にいてすごく楽しくて。自分の感情にすごく素直な子なんです。それに僕にはもったいないような美人です。」
なんか照れる。でも全部ほんとのことやから。
「へえ。気の強い美人かあ。なんか俺の元カノに似てるなあ。すごかったぜ。ちょっと他の女の子と遊びに行っただけでビンタされたことあるなあ。それにしてもまた咲子ちゃんとはま逆だな。あの子大人しい感じの大和撫子だったろ。」
野尻さんが意外そうな顔で僕を見た。
そういえば野尻さんの過去の恋愛話を聞くのは初めてかもしれない。そういえば野尻さんのプライベートはあんまり聞いたことがないような気がするな。いつも聞いてもらうばっかりやから。
それにしてもビンタか。すごい女の子だな。なんかあやもやりそうな感じがするけど。
「ビンタはちょっとすごいですね。なかなかないですよ。でも、その子もそういうことしそうな感じです。全然僕のタイプとちゃうのに、好きになったんですよ。咲子はモロに僕の好みでしたけど。ほんまこればっかりは分かりませんね。」
「そうだな。」
僕と野尻さんは顔を見合わせると、ははっと笑った。さっきまでうじうじと悩んでいた心が嘘のように晴れていた。やっぱり野尻さんに相談してよかった。
それから僕らは何回かビールの追加を注文して、何品かつまみも追加した。その後はお互いの大学のこと、将来のこと、バイト先の正社員への愚痴などなど・・・。とりとめもない話に花を咲かせた。
そんな話をしているうち、ふとあることが気になったので野尻さんに聞いてようと思った。聞いてもどうなるもんでもないのは分かっていたけど。
「野尻さんはA学院大学ですよね。2年の西野あやって子知ってま

すか？」
僕はなんとなく聞いてみた、つもりやった。野尻さんの反応は少し異常やった。
”西野あや”の名前を聞いた瞬間に野尻さんの笑顔は凍りついた。そして急にそれまで見たこともないような怖い顔になった。明らかに動揺している感じや。
「あの野尻さん？どないしたんですか？西野あやのこと知ってるんですか？」
僕は恐る恐る聞いてみた。聞いたらあかんような気がしたけど、聞かんとあかんような気もしていた。
「ああ、名前ぐらいは知ってるよ。連続通り魔事件の犠牲者の子だろ？新聞見たけど綺麗な子だよな。俺は全然しらないけど。可哀想にな。」
そう言った野尻さんの表情はいつもの野尻さんと同じだった。間違いない。野尻さんはあやを知ってる。なんでこんな見え透いた嘘をつくんや。
「それにしても、なんで今その子のことを聞くんだ？津森の知り合いかなんかなのか？」
「いや、気にせんといて下さい。こないだ古新聞まとめてたら、たまたまその子の記事が目について・・・。A学院大学って書いてあったからもしかしたら野尻さん知ってるかと思って・・・。ただの興味本位です。すいません。不謹慎ですよね。」
僕は精一杯の言い訳をした。僕にしては上出来な言い訳だと思う。
「そうか。びっくりしたよ。そんなこと聞かれるとは思ってなかったから。」
野尻さんもそれ以上は深く聞いてはこんかった。
「そろそろ出るか。津森も明日、いやもう今日か。早いだろ。」
そう言って野尻さんが壁に掛っている時計の方へ眼をやった。時計の針はもうすぐ4時を指そうとしていた。いつの間にかこんな時間や。今から家に帰っても2時間ぐらいしか寝られへんな。

「そうですね。出ましょうか。」
そう言って僕たちは席を立った。お勘定は野尻さんの奢りだった。
僕は野尻さんにお礼を言うと、夜明けの街を自転車を押しながらわざとゆっくり歩いた。
また僕の頭の中では色んなことがぐるぐる回っていた。あやがいなくなったことを野尻さんからアドバイスをもらったことで、乗り越えられたのにまた僕の中には新たな疑問が湧き上がってきていた。なぜ野尻さんはあやの名前を聞いただけであんなに動揺したのか。あれは絶対にあやを知っている感じやった。それなのに嘘をついたんはなんでや？
野尻さんの気が強くて美人の元彼女・・・・・。もしかしてあややないんやろうか・・・？
ホテルの裏口で見かけたあやに似た女の子・・・・。やっぱりあれはあやで、もしかしてあやは僕に会いに来たんやなくて野尻さんに会いに来ていた・・・？
僕の考えは一つの答えを導き出した。あやはきっと帰って来る。そうしたら気になること全部聞いてやるんや。絶対や。もう同じ後悔はせえへん。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0881h/

月夜の幽霊

2010年10月11日12時23分発行